

# 製造業の地域展開

伊達木 瀧之助

「製造業の特徴の推移」では製造業全体について、生産、就業、利益、労働分配率等の側面からその特徴と推移を明らかにした。また、「製造業の波及効果、雇用、賃金、付加価値」では、製造業全体について、波及効果、雇用と賃金、付加価値とデフレーターに関する分析を行った。本稿では、製造業の地域展開の状況を、産業小分類レベルの構造変化と関連付けて明らかにしていきたい。

## 1 全国レベルでみた製造業の構造変化

先ず、全国レベルの製造業の産業構造の推移を従業者数によって確認する。高度経済成長の初期であった1957年に製造業の中核を占めていた業種は、織物業（製造業従業者の6.9%）、紡績業（同4.1%）、製材業・木製品製造業（同4.0%）、パン・菓子製造業（3.4%）であり、自動車・同付属製品製造業、発電用・送電用・配電用・産業用電気機械器具製造業、船舶製造・同修理・船用機関製造業がそれぞれ製造業従業者の2.4～2.5%を占め、7位～9位に位置していた。このような産業構造は、高度経済成長の終盤であった1972年には、自動車・同付属品製造業（4.6%）が1位、建設用・建築用金属製品製造業（3.3%）が2位、発電用・送電用・配電用・産業用電気機械器具製造業（2.9%）、電子機器用及び通信機器用部品製造業（2.9%）が4位・5位、通信機械器具・同関連機械器具製造業（2.7%）が8位と機械・金属製品を中心とする構造に変化した。

| 表1 従業者構成比(製造業=100)の上位10業種(1957年, 1972年) |                           |       |       |       |
|---|---------------------------|-------|-------|-------|
|   |                           | 1957年 | 1972年 | 72年順位 |
| 1                                       | 織物業                       | 6.91  | 3.07  | 3     |
| 2                                       | 紡績業                       | 4.07  | 1.71  | 19    |
| 3                                       | 製材業・木製品製造業                | 3.97  | 2.44  | 9     |
| 4                                       | パン・菓子製造業                  | 3.39  | 2.36  | 11    |
| 5                                       | 印刷業(謄写印刷業を除く)             | 2.60  | 2.72  | 6     |
| 6                                       | その他の食料品製造業                | 2.50  | 1.78  | 18    |
| 7                                       | 自動車・同付属品製造業               | 2.46  | 4.63  | 1     |
| 8                                       | 発電用・送電用・配電用・産業用電気機械器具製造業  | 2.46  | 2.94  | 4     |
| 9                                       | 船舶製造・修理業・船用機関製造業          | 2.41  | 2.32  | 13    |
| 10                                      | 染色整理業                     | 2.04  | 1.31  | 24    |
|   |                           | 1957年 | 1972年 | 57年順位 |
| 1                                       | 自動車・同付属品製造業               | 2.46  | 4.63  | 7     |
| 2                                       | 建設用・建築用金属製品製造業(製かん板金業を含む) | 1.07  | 3.31  | 27    |
| 3                                       | 織物業                       | 6.91  | 3.07  | 1     |
| 4                                       | 発電用・送電用・配電用・産業用電気機械器具製造業  | 2.46  | 2.94  | 8     |
| 5                                       | 電子機器用および通信機器用部分品製造業       | 0.24  | 2.86  | 100   |
| 6                                       | 印刷業(謄写印刷業を除く)             | 2.60  | 2.72  | 5     |
| 7                                       | 外衣製造業(和式を除く)              | 1.79  | 2.69  | 12    |
| 8                                       | 通信機械器具・同関連機械器具製造業         | 1.58  | 2.68  | 14    |
| 9                                       | 製材業・木製品製造業                | 3.97  | 2.44  | 3     |
| 10                                      | プラスチック製品製造業(別掲を除く)        | 0.60  | 2.42  | 53    |
| 資料 総務省「事業所企業統計調査」                       |                           |       |       |       |

この間の構成比の変化をみると、高度経済成長初期に中核を占めていた織物業、紡績業、製材業・木製品製造業、パン・菓子製造業がこの順に最も大きな低下を示している。一方、上昇幅の大きい業種は、電子機器用及び通信機器用部品製造業、建設用・建築用金属製品製造業、自動車・同付属品製造業が1位～3位、通信機械器具・同関連機械器具製造業、一般産業用機械・装置製造業が5位・6位と機械・金属製品の伸長が著しい。特に、電子機器用及び通信機器用部品製造業の伸長は、顕著であり、構成比

| 表2 従業者構成比の変化(1957年～1972年) |      |             |       |
|---------------------------|------|-------------|-------|
| 上位10業種                    | 差    | 下位10業種      | 差     |
| 電子機器用および通信機器用部分品製造業       | 2.62 | 他に分類されない製造業 | -0.67 |
| 建設用・建築用金属製品製造業            | 2.24 | 繊維機械製造業     | -0.71 |
| 自動車・同付属品製造業               | 2.16 | その他の食品品製造業  | -0.72 |
| プラスチック製品製造業               | 1.82 | 染色整理業       | -0.73 |
| 通信機械器具・同関連機械器具製造業         | 1.10 | 製糸業         | -0.86 |
| 一般産業用機械・装置製造業             | 0.93 | 化学肥料製造業     | -0.93 |
| 外衣製造業(和式を除く)              | 0.90 | パン・菓子製造業    | -1.03 |
| 金属打抜・被覆・彫刻業・熱処理業          | 0.90 | 製材業・木製品製造業  | -1.52 |
| セメント・同製品製造業               | 0.89 | 紡績業         | -2.36 |
| その他の機械・同部分品製造業            | 0.69 | 織物業         | -3.84 |
| 資料 総務省「事業所企業統計調査」         |      |             |       |

の順位では、1957年～72年の間に100位から5位に上昇している。この他では、プラスチック製品製造業(4位)、外製造業(7位)などの構成比上昇が目立っている。なお、織物業、製材業・木製品製造業は、構成比の低下幅が大きいものの、構成比の順位では、それぞれ3位、9位と引き続き上位に位置しており、上昇幅が大きかった外製造業が7位に上昇している。また、印刷業は、1957年～72年の間に若干構成比が上昇し、順位も5位、6位と安定的に上位で推移している。

安定成長期の終盤に当たる1991年には、自動車・同付属品製造業(6.9%)、電子機器用・通信機器用部品製造業(5.6%)、発電用・送電用・配電用・産業用電気機械器具製造業(3.7%)が1位～3位、建設用・建築用金属製品製造業(3.3%)、通信機械器具・同関連機械器具製造業(2.8%)一般産業用機械・装置製造業(2.4%)が6位・8位・9位と、高度成長期終盤からさらに、機械・金属製品を中心とする構造に進み、特に、自動車・同付属品製造業、電子機器用・通信機器用部品製造業の比重が高まっている。この他では、外衣製造業(3.6%)、その他の食品品製造業(2.8%)、パン・菓子製造業(2.3%)など衣食関係の業種がそれぞれ4

| 表3 従業者構成比(製造業=100)の上位10業種(1972年, 1991年) |                          |       |       |       |
|---|--------------------------|-------|-------|-------|
|   |                          | 1972年 | 1991年 | 91年順位 |
| 1                                       | 自動車・同附属品製造業              | 4.63  | 6.91  | 1     |
| 2                                       | 建設用・建築用金属製品製造業(製缶板金業を含む) | 3.31  | 3.11  | 6     |
| 3                                       | 織物業                      | 3.07  | 1.07  | 23    |
| 4                                       | 発電用・送電用・配電用・産業用電気機械器具製造業 | 2.94  | 3.72  | 3     |
| 5                                       | 電子機器用・通信機器用部分品製造業        | 2.86  | 5.57  | 2     |
| 6                                       | 印刷業(謄写印刷業を除く)            | 2.72  | 3.49  | 5     |
| 7                                       | 外衣製造業(和式を除く)             | 2.69  | 3.55  | 4     |
| 8                                       | 通信機械器具・同関連機械器具製造業        | 2.68  | 2.77  | 8     |
| 9                                       | 製材業, 木製品製造業              | 2.44  | 1.12  | 21    |
| 10                                      | パン・菓子製造業                 | 2.36  | 2.31  | 10    |
|   |                          | 1972年 | 1991年 | 72年順位 |
| 1                                       | 自動車・同附属品製造業              | 4.63  | 6.91  | 1     |
| 2                                       | 電子機器用・通信機器用部分品製造業        | 2.86  | 5.57  | 5     |
| 3                                       | 発電用・送電用・配電用・産業用電気機械器具製造業 | 2.94  | 3.72  | 4     |
| 4                                       | 外衣製造業(和式を除く)             | 2.69  | 3.55  | 7     |
| 5                                       | 印刷業(謄写印刷業を除く)            | 2.72  | 3.49  | 6     |
| 6                                       | 建設用・建築用金属製品製造業(製缶板金業を含む) | 3.31  | 3.11  | 2     |
| 7                                       | その他の食料品製造業               | 1.38  | 2.79  | 20    |
| 8                                       | 通信機械器具・同関連機械器具製造業        | 2.68  | 2.77  | 8     |
| 9                                       | 一般産業用機械・装置製造業            | 2.34  | 2.38  | 11    |
| 10                                      | パン・菓子製造業                 | 2.36  | 2.31  | 10    |
| 資料 総務省「事業所企業統計調査」                       |                          |       |       |       |

位・7位・10位と上位を占め、印刷業(3.5%)も5位と高度成長期に続き安定して上位を維持している。なお、表3は、1991年の産業分類により作成しているので、1972年の上位業種が表2と一部異なっている(表2で1972年に10位であったプラスチック製品製造業は1991年の産業分類では、中分類に格上げされて6つの小分類に細分されたため表3には現れない。同製造業は、1972年2.42%、1991年3.55%であり、72年の分類に従えば1991年に5位に位置することとなる)。

| 上位10業種                   | 差    | 下位10業種            | 差     |
|--------------------------|------|-------------------|-------|
| 電子機器用・通信機器用部分品製造業        | 2.71 | セメント・同製品製造業       | -0.40 |
| 自動車・同附属品製造業              | 2.28 | 家具製造業             | -0.43 |
| その他の食料品製造業               | 1.41 | 鋳鉄鋳物製造業           | -0.44 |
| 外衣製造業(和式を除く)             | 0.86 | 染色整理業             | -0.48 |
| 電子応用装置製造業                | 0.85 | ニット製造業            | -0.55 |
| 発電用・送電用・配電用・産業用電気機械器具製造業 | 0.78 | 高炉による製鉄業          | -0.61 |
| 印刷業(謄写印刷業を除く)            | 0.77 | 紡績業               | -1.17 |
| その他の機械・同部分品製造業           | 0.71 | 製材業, 木製品製造業       | -1.32 |
| 電子計算機・同附属装置製造業           | 0.69 | 船舶製造・修理業, 船用機関製造業 | -1.51 |
| 工業用プラスチック製品製造業           | 0.39 | 織物業               | -2.00 |
| 資料 総務省「事業所企業統計調査」        |      |                   |       |

| 上位業種                     | 差      | 増減率    | 下位業種                  | 差       | 増減率   |
|--------------------------|--------|--------|-----------------------|---------|-------|
| 電子機器用・通信機器用部分品製造業        | 404303 | 106.0  | 造作材・合板・建築用組立材料製造業     | -34481  | -30.5 |
| 自動車・同附属品製造業              | 357177 | 57.9   | ゴム製・プラスチック製履物・同附属品製造業 | -37283  | -44.6 |
| その他の食料品製造業               | 209627 | 114.2  | セメント・同製品製造業           | -41957  | -16.0 |
| 外衣製造業(和式を除く)             | 141554 | 39.5   | 化学繊維製造業               | -44977  | -53.7 |
| 発電用・送電用・配電用・産業用電気機械器具製造業 | 132742 | 33.9   | 家具製造業                 | -46482  | -19.6 |
| 印刷業(謄写印刷業を除く)            | 129573 | 35.7   | 鋳鉄鋳物製造業               | -55586  | -48.4 |
| 電子応用装置製造業                | 120447 | 1696.4 | 染色整理業                 | -58299  | -33.5 |
| その他の機械・同部分品製造業           | 111633 | 56.1   | ニット製造業                | -63539  | -25.0 |
| 電子計算機・同附属装置製造業           | 100994 | 165.7  | 高炉による製鉄業              | -75841  | -42.7 |
| 工業用プラスチック製品製造業           | 60498  | 63.4   | 紡績業                   | -152342 | -66.8 |
| 事務用・サービス用・民生用機械器具製造業     | 56931  | 40.2   | 製材業, 木製品製造業           | -167478 | -51.4 |
| 製版業                      | 51586  | 151.6  | 船舶製造・修理業, 船用機関製造業     | -195786 | -63.3 |
| その他の繊維製品製造業              | 50992  | 65.7   | 織物業                   | -258325 | -63.2 |
| 資料 総務省「事業所企業統計調査」        |        |        |                       |         |       |

1972年～1991年の構成比の変化をみると、電子機器用・通信機器用部分品製造業、自動車・同付属品製造業の拡大が特に大きい。この他、電子応用装置製造業、発電用・送電用・配電用・産業用電気機械器具製造業、その他の機械・同部分品製造業、電子計算機・同付属装置製造業が構成比拡大の上位5位・6位・8位・9位に位置しており、総じて、電子・電気と自動車を中心とする機械産業の拡大が顕著である。この他では、その他の食料品製造業、外衣製造業が構成比拡大の上位3位・4位、印刷業が7位に位置しており、衣食の最終製品と情報に関連する業種の拡大が目立つ。また、1991年の産業分類で細分されたプラスチック製造業では、工業用プラスチック製品製造業が拡大の10位に位置しており、プラスチック製品製造業全体では、1.13ポイント拡大している。一方、この期間に構成比が縮小した業種をみると、織物業、「船舶製造・修理業、船用機関製造業」、製材業、木製品製造業、紡績業の縮小が特に大きい。高炉による製鉄業もこれらに次いで縮小が大きい。この他では、織物業、紡績業とともに衣料の素材部門に当たるニット製造業、染色整理業の縮小が大きい。総じて、素材産業の縮小が目立ち、セメント・同製品製造業も縮小幅の大きい方から

|    | 1991年             | 2006年 | 06年順位 |    | 1991年             | 2006年 | 91年順位 |    |
|----|-------------------|-------|-------|----|-------------------|-------|-------|----|
| 1  | 自動車・同付属品製造業       | 7.01  | 9.15  | 1  | 自動車・同付属品製造業       | 7.01  | 9.15  | 1  |
| 2  | 電子部品・デバイス製造業      | 5.95  | 6.21  | 2  | 電子部品・デバイス製造業      | 5.95  | 6.21  | 2  |
| 3  | 織物製外衣・シャツ製造業      | 3.83  | 1.56  | 13 | その他の食料品製造業        | 2.80  | 4.46  | 7  |
| 4  | 発電用・送電用等電気機械器具製造業 | 3.77  | 3.44  | 5  | 印刷業               | 3.54  | 3.85  | 5  |
| 5  | 印刷業               | 3.54  | 3.85  | 4  | 発電用・送電用等電気機械器具製造業 | 3.77  | 3.44  | 4  |
| 6  | 建設用・建築用金属製品製造業    | 3.15  | 3.00  | 6  | 建設用・建築用金属製品製造業    | 3.15  | 3.00  | 6  |
| 7  | その他の食料品製造業        | 2.80  | 4.46  | 3  | パン・菓子製造業          | 2.34  | 2.87  | 10 |
| 8  | 一般産業用機械・装置製造業     | 2.40  | 2.76  | 9  | その他の機械・同部分品製造業    | 2.23  | 2.78  | 11 |
| 9  | 通信機械器具・同関連機械器具製造業 | 2.36  | 1.70  | 11 | 一般産業用機械・装置製造業     | 2.40  | 2.76  | 8  |
| 10 | パン・菓子製造業          | 2.34  | 2.87  | 7  | 水産食料品製造業          | 1.80  | 2.05  | 12 |

資料 総務省「事業所企業統計調査」

10番目に位置している。

従業者数の変化をみると、増加数の大きい方では、電子機器用・通信機器用部分品製造業が40.4万人増、自動車・同付属品製造業が35.7万人増と際立って多く、その他の食料品製造業が21万人増、外衣製造業、発電用・送電用・配電用・産業用電気機械器具製造業、印刷業、電子応用装置製造業、その他の機械・同部分品製造業、電子計算機・同付属装置製造業がそれぞれ10万人～14万人程度の増加となっている。一方、減少数の大きい方では、織物業が25.8万人減、船舶製造・修理業、船用機関製造業が19.6万人減、製材業、木製品製造業が16.7万人減、紡績業が15.2万人減と減少幅が大きく、次いで、高炉による製鉄業が7.6万人減、ニット製造業、染色整理業、鋳鉄鋳物製造業がそれぞれ5万人台～6万人台減、家具製造業、化学繊維製造業、セメント・同製品製造業がそれぞれ4万人台の減少となっている。また、増減率をみると、増加業種では、電子応用装置製造業が18倍程度に拡大したのをはじめ、電子計算機・同付属装置製造業が2.7倍程度、電子機器用・通信機器用部分品製造業が2倍程度と電子機械関係業種の拡大が特に大きい。機械関係業種では、自動車・同付属品製造業、そ

| 上位10業種            | 差    | 下位10業種            | 差     |
|-------------------|------|-------------------|-------|
| 自動車・同付属品製造業       | 2.14 | セメント・同製品製造業       | -0.32 |
| その他の食料品製造業        | 1.66 | 下着類製造業            | -0.32 |
| その他の機械・同部分品製造業    | 0.54 | 発電用・送電用等電気機械器具製造業 | -0.33 |
| パン・菓子製造業          | 0.53 | 染色整理業             | -0.34 |
| 特殊産業用機械製造業        | 0.47 | 製材業、木製品製造業        | -0.39 |
| 畜産食料品製造業          | 0.37 | 紡績業               | -0.43 |
| 一般産業用機械・装置製造業     | 0.36 | ニット製外衣・シャツ製造業     | -0.43 |
| 医薬品製造業            | 0.31 | 織物業               | -0.59 |
| 印刷業               | 0.31 | 通信機械器具・同関連機械器具製造業 | -0.66 |
| 工業用プラスチック製品製造業    | 0.29 | 織物製外衣・シャツ製造業      | -2.27 |
| 資料 総務省「事業所企業統計調査」 |      |                   |       |

他の機械・同部品製造業も56%台～57%台と大幅に拡大している。このほかの業種では、製版業(2.5倍程度)、工業用プラスチック製品製造業(63%)等の拡大が大きい。これに対し、減少業種では、衣料関係の紡績業、織物業がそれぞれ60%台の減、船舶製造・修理業、船用機関製造業63%減と3分の1程度に縮小し、製材・木製品製造業、化学繊維製造業がそれぞれ50%台の減と2分の1程度に縮小している。鋳鉄鋳物製造業、高炉による製鉄業もそれぞれ40%台の減と大幅に縮小している。

安定成長の期間におけるこのような産業構造の変化は、後にみるように地域の製造業の動向に大きな影響を及ぼすこととなる。

2006年の製造業の業種別構成比は、1991年と大きく変わっていない。自動車・同付属品製造業(9.1%)、電子部品・デバイス製造業(6.2%)が1位・2位を占め、1991年からさらに構成比を高めている。この他、発電用・送電用等電気機械器具製造業(3.4%)、建設用・建築用金属製品製造業(3.0%)、その他の機械・同部品製造業(2.8%)、一般産業用機械・装置製造業(2.8%)が5位・6位・8位・9位に位置しており、機械産業を中心とする産業構造である。機械・金属以外では、その他の食料品製造業(4.5%)、パン・菓子製造業(2.9%)、水産食料品製造業(2.1%)が3位・7位・10位、印刷業(3.8%)が4位と、食の最終製品と情報関連の業種が上位に位置している。なお、表6は、2006年の産業分類によって作成しているので、1991年の産業と構成比が表3と異なっている。

バブル崩壊後の長期経済低迷とそこからの回復過程に当たる1991年～2006年間の構成比の変化をみると、構成比が拡大した業種では、自動車・同付属品製造業の拡大が引き続き大きい。機械関係の業種では、この他、その他の機械・同部品製造業、特殊産業用機械製造業、一般産業用機械・装置製造業がそれぞれ拡大の大きい方から3位・5位・7位に位置している。この他の業種では、その他の食料品製造業の拡大が自動車・同付属品製造業に次いで大きい。食料品関係の業種では、この他、パン・菓子製造業、畜産食料品製造業がそれぞれ拡大の大きい方から4位・6位に位置し



| 上位業種              | 差     | 増減率    | 下位業種              | 差       | 増減率    |
|-------------------|-------|--------|-------------------|---------|--------|
| その他の食品製造業         | 52940 | 13.59  | 電子計算機・同附属装置製造業    | -54138  | -33.57 |
| 化粧品・歯磨等化粧品用調整品製造業 | 17318 | 48.16  | 陶磁器・同関連製品製造業      | -54375  | -46.81 |
| 特殊産業用機械製造業        | 8517  | 6.44   | 下着類製造業            | -54775  | -68.94 |
| 医療用機械器具・医療用品製造業   | 7241  | 12.07  | その他の繊維製品製造業       | -55258  | -42.63 |
| 航空機・同附属品製造業       | 2633  | 8.50   | 金属加工機械製造業         | -56081  | -26.09 |
| 情報記録物製造業          | 2124  | 28.25  | 電子応用装置製造業         | -57278  | -44.91 |
| 非鉄金属第2次製錬・精製業     | 688   | 4.14   | 製鉄業               | -59121  | -53.88 |
| 清涼飲料製造業           | 677   | 2.24   | 一般産業用機械・装置製造業     | -59535  | -17.83 |
| 印刷関連サービス業         | 673   | 20.80  | 紡績業               | -64583  | -85.35 |
| 武器製造業             | 643   | 25.52  | 民生用電気機械器具製造業      | -64788  | -43.65 |
| 産業用運搬車両・同部分品等製造業  | -68   | -0.80  | 自動車・同附属品製造業       | -66964  | -6.87  |
| 工業用革製品製造業(手袋を除く)  | -229  | -26.75 | 染色整理業             | -67154  | -58.01 |
| パルプ製造業            | -289  | -7.87  | ニット製外衣・シャツ製造業     | -77067  | -64.74 |
| 毛皮製造業             | -530  | -65.51 | 家具製造業             | -83755  | -43.82 |
| 理化学機械器具製造業        | -581  | -9.74  | 製材業、木製品製造業        | -84285  | -53.32 |
| その他の石油製品・石炭製品製造業  | -627  | -18.32 | セメント・同製品製造業       | -94734  | -43.06 |
| 調味料製造業            | -794  | -1.24  | 織物業               | -101849 | -67.57 |
| 測量機械器具製造業         | -1213 | -20.56 | 印刷業               | -110419 | -22.43 |
| 加工紙製造業            | -1370 | -3.92  | 建設用・建築用金属製品製造業    | -140083 | -31.98 |
| 飼料・有機質肥料製造業       | -1413 | -6.39  | 通信機械器具・同関連機械器具製造業 | -159898 | -48.70 |
| 舗装材料製造業           | -1454 | -16.65 | 発電用・送電用等電気機械器具製造業 | -183305 | -34.97 |
| その他の非鉄金属製造業       | -1509 | -13.84 | 電子部品・デバイス製造業      | -210727 | -25.48 |
| 潤滑油・グリース製造業       | -1523 | -28.45 | 織物製外衣・シャツ製造業      | -378268 | -70.96 |

資料 総務省「事業所企業統計調査」

ている。機械関係・食料品関係以外の業種では、医薬品製造業が8位に位置し、印刷業、工業用プラスチック製品製造業がそれぞれ9位・10位と安定成長期に続き拡大の大きい方の上位に位置している。一方、構成比が縮小した業種では、織物製外衣・シャツ製造業の縮小が際立って大きい。衣料の最終製品では、この他、ニット製外衣・シャツ製造業、下着類製造業

がそれぞれ縮小の大きい方から4位・9位に位置している。また、衣料の素材関係では、織物業、紡績業、染色整理業がそれぞれ縮小の大きい方から3位・5位・7位に位置しており、総じて衣料関連業種の縮小が目立つ。機械関係業種でも、高度成長期・安定成長期を通じて構成比の拡大が続いていた通信機械器具・同関連機械器具製造業、発電用・送電用等電気機械器具製造業が縮小の大きいほうから2位・8位と初めて縮小に転じている。また、素材関係業種では、製材業・木製品製造業、セメント・同製品製造業がそれぞれ縮小の大きい方から6位・10位に位置しており、前者は高度成長期以来、後者は安定成長期以来、縮小が続いている。

ところでこの期間には、398.4万人(28.7%)減と製造業の従業者数が大幅に減少し、構成比が拡大した業種でも大半は、従業者数が減少している。この期間に従業者数が増加した業種は、152業種中10業種にすぎない。増加数を見ると、その他の食料品製造業が5.3万人増、化粧品・歯磨等化粧品調製品製造業が1.7万人増と、食品と身のまわり品関係の2業種の増加がやや大きいものの、この他は、特殊産業用機械製造業、医療用機械器具・医療用品製造業がそれぞれ7千人台～8千人台の増加、航空機・同付属品製造業、情報記録物製造業それぞれ2千人台の増加、非鉄金属第2次製錬・精製業、清涼飲料製造業、印刷関連サービス業、武器製造業がそれぞれ千人未満の増加に止まっている。加えて、これらの業種は、特殊産業用機械製造業(14.1万人)を除くと、従業者数10万人未満の規模の小さい業種が多く、製造業全体の動向に及ぼす影響は小さい(その他の食料品製造業は、44.2万人と従業者数が多いが、多様で小規模な各種食料品製造業の集合体である)。一方、製造業の主要業種は、全て、この期間に従業者数が減少している。特に、織物製外衣・シャツ製造業(1991年の構成比3位)は、37.8万人減と最大の減少を示し、減少率は71%に達している。これに次いで減少が大きい業種は、機械金属関係の4業種で、自動車・同付属品製造業と並ぶ基幹産業である電子部品・デバイス製造業(同2位)が21.1万人減、発電用・送電用電気機械器具製造業(同4位)が18.3万人減、

通信機械器具・同関連機械器具製造業（同 9 位）が16万人減，建設用・建築用金属製品製造業（同 6 位）が14万人減であり，減少率は電子部品・デバイス製造業が25.5%，他の 3 業種が製造業全体を上回りそれぞれ35%，48.7%，32%となっている。印刷業（同 5 位）も，11万人減とこれらに次いで減少が大きく，減少率は22.4%である。これらの業種は，建設用・建築用金属製品製造業を除き，高度成長期・安定成長期を通じて増加を続けた後，減少に転じている（建設用・建築用金属製品製造業は安定成長期に小幅な減少）。これに対し，織物業，セメント・同製品製造業，製材・木製品製造業，家具製造業は，安定成長期に続いて減少し，減少幅がそれぞれ 8 万人台～10万人台と上記 6 業種に次ぎ，減少率が40%台～60%台と大きい。衣料関係の業種は，織物製外衣・シャツ製造業，織物業をはじめ，ニット製外衣・シャツ製造業，染色整理業，紡績業，下着類製造業など，減少率が大きく，概ね60%台～80%台に達している。また，機械関係業種の中では，通信機械器具・同関連機械器具製造業のほか，民生用電気機械器具製造業，電子応用装置製造業の減少率が40%台と大きく，電子計算機・同付属装置製造業の減少率も30%台と製造業全体を上回っている。このほか，製鉄業の減少率が50%台と大きい。なお，自動車・同付属品製造業は，減少数が6.7万人，減少率が6.9%と，減少率は比較的小さいものの，減少数は大きいほうから13番目に位置している。

これまでみてきた製造業における産業構造の変化を，1957年・1972年，1972年・1991年，1991年・2006年について，各年間の産業小分類別従業者構成の相関係数によって確認すると，それぞれ0.740，0.887，0.956となる（1957年・1972年は1972年の産業分類，1972年・1991年は1991年の産業分類，1991年・2006年は2006年の産業分類に基づく相関係数）。相関係数が小さい程，2時点間における全体としての産業構造の変化が大きいと考えられるから，製造業における産業構造の変化は，高度成長期，安定成長期，バブル崩壊以降と次第に小さくなってきたとみることができる。また，産業構造の変化を，産業の集中度という観点からみると，産業小分類別従

業者構成比の分散は、1957年～72年に縮小した後、1972年～91年、1991年～2006年にそれぞれ拡大している。構成比の分散は、小さい程相対的に産業構造が多様であり、大きい程相対的に産業構造の集中度が高いことを示しているから、製造業の産業構造は、高度成長期に多様化の方向へ進んだ後、安定成長期、バブル崩壊以降を通じて、集中化する方向へ進んだとみることができる。このような安定成長期、バブル崩壊以降における産業構造の集中化傾向は、1980年代、1990年代後半以降の時期に進展が大きかった。製造業の産業構造が、高度成長期に多様化の方向へ、安定成長期・バブル崩壊以降に集中化の方向へ進んだことは、上位業種の累積構成比の推

表9 産業の集中度と構成比順位の推移

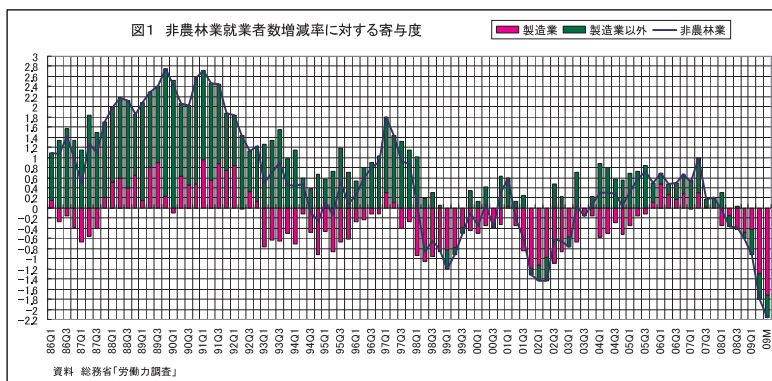
|                   | 1957年 | 1972年 | 1972年 | 1975年 | 1978年 | 1981年 | 1986年 | 1991年 | 1991年 | 1996年 | 2001年 | 2006年 |
|-------------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 構成比の分散            | 0.79  | 0.66  | 0.60  | 0.62  | 0.64  | 0.69  | 0.80  | 0.89  | 0.96  | 0.99  | 1.10  | 1.23  |
| 上位2業種の累積構成比       | 11.0  | 7.9   | 7.9   | 8.4   | 9.1   | 9.4   | 11.5  | 12.5  | 13.0  | 13.3  | 14.3  | 15.4  |
| 上位5業種の累積構成比       | 20.9  | 16.8  | 16.8  | 17.2  | 18.1  | 19.4  | 21.8  | 23.2  | 24.1  | 24.0  | 25.8  | 27.1  |
| 自動車・同附属品製造業       | 7     | 1     | 1     | 1     | 1     | 1     | 1     | 1     | 1     | 1     | 1     | 1     |
| 電子部品・デバイス製造業      | 100   | 5     | 5     | 11    | 5     | 2     | 2     | 2     | 2     | 2     | 2     | 2     |
| その他の食料品製造業        | 6     | 18    | 20    | 17    | 14    | 10    | 8     | 7     | 7     | 4     | 3     | 3     |
| 印刷業               | 5     | 6     | 6     | 4     | 4     | 4     | 5     | 5     | 5     | 3     | 4     | 4     |
| 発電用・送電用等電気機械器具製造業 | 8     | 4     | 4     | 6     | 6     | 7     | 4     | 3     | 4     | 5     | 5     | 5     |
| 織物製外衣・シャツ製造業      | 12    | 7     | 7     | 3     | 2     | 3     | 3     | 4     | 3     | 6     | 11    | 13    |
| 通信機械器具・同関連機械器具製造業 | 14    | 8     | 8     | 8     | 7     | 5     | 6     | 8     | 9     | 12    | 12    | 11    |
| 建設用・建築用金属製品製造業    | 27    | 2     | 2     | 2     | 3     | 6     | 7     | 6     | 6     | 7     | 6     | 6     |
| 織物業               | 1     | 3     | 3     | 5     | 10    | 11    | 16    | 23    | 23    | 33    | 43    | 53    |
| 紡績業               | 2     | 19    | 16    | 20    | 25    | 33    | 40    | 55    | 53    | 84    | 104   | 118   |
| 製材業、木製品製造業        | 3     | 9     | 9     | 12    | 11    | 13    | 19    | 21    | 20    | 27    | 30    | 33    |
| パン・菓子製造業          | 4     | 11    | 10    | 10    | 8     | 8     | 9     | 10    | 10    | 9     | 7     | 7     |
| その他の機械・同部分品製造業    | 43    | 21    | 18    | 19    | 18    | 15    | 11    | 11    | 11    | 10    | 9     | 8     |
| 一般産業用機械・装置製造業     | 16    | 12    | 11    | 7     | 9     | 9     | 10    | 9     | 8     | 8     | 8     | 9     |
| 船舶製造・修理業、船用機関製造業  | 9     | 13    | 12    | 9     | 13    | 18    | 26    | 36    | 35    | 32    | 34    | 30    |
| 水産食料品製造業          | 11    | 20    | 17    | 14    | 15    | 14    | 12    | 12    | 12    | 11    | 10    | 10    |

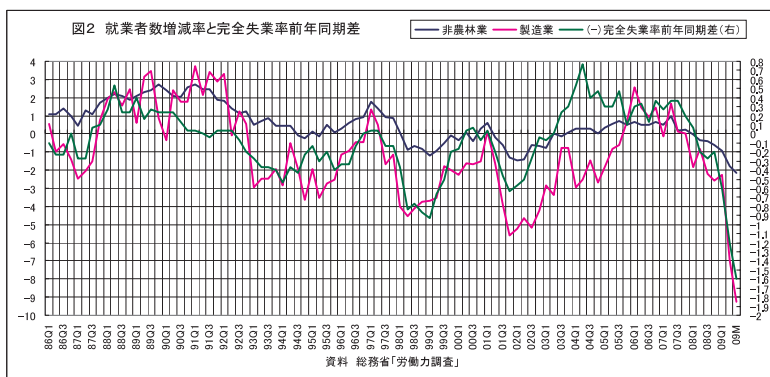
資料 総務省「事業所企業統計調査」

移によっても確認することができる。上位5業種の累積構成比は、1957年の21%から1972年に17%に縮小したが、その後拡大に転じ、1991年に24%程度、2006年に27%となっている。上位2業種の累積構成比も同様の推移を示しており、2006年には、自動車・同付属品製造業と電子部品・デバイス製造業の2業種で製造業全体の従業者の15%を占めている。

このような産業構造の集中化傾向は、製造業が、景気変動や外部からのショックの影響を受けやすい構造になっていることを意味する。

製造業就業者数は、増減率の振幅が大きく、高度成長期の終盤以降、景気後退期に減少することもめずらしいことではなかった。特に、バブル崩壊以降は、減少期間が長期化し、景気上昇局面の終盤ようやく増加に転じる状況にある。米国発の金融危機を契機とする世界同時不況下の2007年終盤以降の景気後退局面でも、製造業就業者数は、2008年第一四半期に減少に転じ、以降期を追って減少率が拡大している。特に、2009年第二四半期には、前年同期比で7.0%減とバブル崩壊以降最大の減少となり、2009年7月には9.3%減と、第一次石油危機後の不況下にあった1975年3月の8.7%減を上回る1954年以降最大の減少となった。また、非農林業では、第一次石油危機に伴う景気後退期、バブル崩壊後における金融危機を契機とする景気後退期、ITバブル崩壊を契機とする景気後退期、世界同時不況に伴う景気後退期などに就業者数が減少している。これらの時期にお



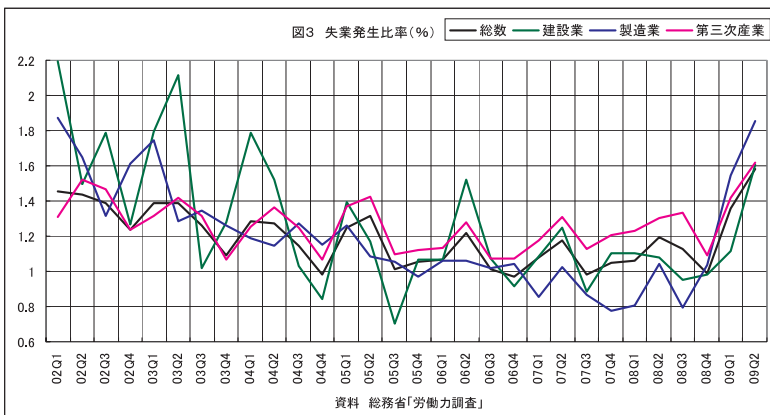


る非農林業就業者数の減少は、製造業における就業者数の減少を主な要因としている。

また、製造業就業者数の増減は、完全失業率の動向に強い影響を及ぼしている。図2から明らかなように、バブル崩壊以降、製造業就業者数が減少する時期に完全失業率が上昇する傾向が認められる。同様の傾向は、第一次石油危機後の景気後退期、1980年代半ばの急速な円高に伴う景気後退期にもみられる。前稿で明らかにしたように、バブル崩壊以降、製造業では、生産水準にかかわらず雇用を抑制しようとする傾向が強いので、生産の動向と就業者数の動向が直ちに結びつくわけではないが、製造業の生産と就業者数の前年同期比の間には、1979年以降、就業者数が生産に2期遅れて0.648の相関が認められる。製造業の生産の減少は、やや遅れて就業者数の減少、離職者の増加を導き、製造業からの離職失業者を増加させる。また、前項で明らかにしたように、製造業は、他産業への波及効果が大きいので、その生産の減少は、他産業の就業者数の減少、離職失業者の増加を招くとともに、全体としての労働力需要を低下させ、求職者の就職環境を悪化させる。これが、製造業就業者数が減少する時期に完全失業率が上昇する理由であろう。世界同時不況に伴う2007年終盤以降の景気後退では、製造業の生産が2008年第2四半期以降減少に転じ、2008年第4四半期には前年同期比で14.6%減、2009年第1四半期には34.6%減、第2四半期には

22.7%減と1953年以降最も大幅な減少となった。上述の製造業就業者数の大幅な減少は、このような生産の急速な減少に起因するものである。これに伴い、完全失業率（季節調整値）も2008年第2四半期以降上昇に転じている。特に、2009年第2四半期以降の上昇が急速であり、2009年7月には5.7%と1953年以降最も高い水準となっている。失業情勢の変化は、失業期間の短い失業者にも先行的に現れる。そこで、過去3年間に離職した失業者について、失業期間3か月未満の人数を離職前産業の就業者数で除した比率（失業発生比率）を求め、その推移をみると、製造業の失業発生比率が2009年に入って急速に上昇し、完全失業率の既往のピークであった2002年初めの水準に達していることが分かる。製造業の同比率の上昇は、他の産業に比べて大きく、最近の失業率の上昇に製造業の就業者数の減少が強い影響を及ぼしていることを示している。なお、失業発生比率を全産業について雇用形態別にみると、派遣社員が際立って高く、2008年第2四半期～第4四半期の7%程度から2009年第1四半期・第2四半期には14%台へ急速に高まっている。正規の職員・従業員、パート・アルバイトの同比率は2009年第2四半期にそれぞれ1.4%、2.6%で2008年第2四半期～第4四半期に比べそれぞれ0.4ポイント程度上昇している。

次に、製造業の生産、就業の動向を業種別に分析する。生産についてみ



| 表10 生産の増減率(%)     |       |       |       |       |       |       |       |       |      |      |      |      |
|-------------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|------|------|------|
|                   | 前年同期比 |       |       |       | 寄与度   |       |       |       | 寄与率  |      |      |      |
|                   | 08Q4  | 09Q1  | 09Q2  | 09M7  | 08Q4  | 09Q1  | 09Q2  | 09M7  | 08Q4 | 09Q1 | 09Q2 | 09M7 |
| 製造工業              | -14.6 | -34.6 | -27.9 | -22.7 | -14.6 | -34.6 | -27.9 | -22.7 | 100  | 100  | 100  | 100  |
| 鉄鋼業               | -14.8 | -46.2 | -42.0 | -30.1 | -0.9  | -2.8  | -2.6  | -1.8  | 5.9  | 8.0  | 9.3  | 7.9  |
| 金属製品工業            | -8.3  | -23.8 | -21.1 | -16.7 | -0.4  | -1.2  | -1.1  | -0.9  | 2.9  | 3.5  | 3.9  | 3.8  |
| 一般機械工業            | -19.4 | -42.1 | -48.1 | -44.8 | -2.5  | -5.7  | -6.2  | -5.5  | 17.0 | 16.5 | 22.1 | 24.4 |
| 電気機械工業            | -10.1 | -29.4 | -25.7 | -21.3 | -0.6  | -1.8  | -1.5  | -1.2  | 3.8  | 5.1  | 5.4  | 5.5  |
| 電子部品・デバイス工業       | -24.5 | -49.0 | -30.1 | -18.1 | -2.5  | -4.8  | -3.0  | -1.7  | 17.0 | 13.8 | 10.7 | 7.7  |
| 輸送機械工業            | -20.8 | -52.0 | -41.8 | -32.8 | -3.8  | -9.8  | -7.5  | -6.3  | 26.3 | 28.3 | 26.9 | 27.6 |
| 食料品・たばこ工業         | -1.2  | 0.8   | 3.3   | -1.3  | -0.1  | 0.0   | 0.2   | -0.1  | 0.6  | -0.1 | -0.9 | 0.4  |
| 上記以外              | -10.9 | -24.8 | -17.9 | -15.0 | -3.9  | -8.6  | -6.3  | -5.2  | 26.6 | 24.9 | 22.6 | 22.7 |
| 資料 経済産業省「鉱工業生産指数」 |       |       |       |       |       |       |       |       |      |      |      |      |

ると、2008年第4四半期以降、前年同期減少率が特に大きな業種は、輸送機械工業、一般機械工業、電子部品・デバイス工業、鉄鋼業の4業種であり、減少率が最も大きかった2009年第1四半期・第2四半期には、それぞれが概ね40%台・50%台の減少となった。2008年第4四半期以降の製造業全体の生産の前年同期比(2008年第4四半期14.6%減, 2009年第1四半期34.6%減, 第2四半期22.7%減, 7月22.7%減)に対する業種別寄与率をみると、輸送機械工業が26%台~28%台、一般機械工業が16%台~24%台を占め、これらに電子部品・デバイス工業、鉄鋼業を加えると、製造業全体の減少率の3分の2を占める。先にみたように、輸送機械工業、電子部品・デバイス工業、一般機械工業は、我が国製造業の基幹業種であり、これらに対する雇用の集中度が高まっている。これらの業種が世界同時不況のショックを強く受けたことが国内の景気後退と雇用・失業情勢の深刻化を招いた基本的要因である。

また、就業者数についてみると、前年同期減少率が大幅に拡大した2009年第2四半期以降では、生産の落ち込みが特に大きかった電子部品・デバイス製造業、輸送用機械器具製造業、一般機械器具製造業の減少が大きい



ほか、電気機械器具製造業、金属製品製造業の減少も大きい。製造業就業者数の前年同期減少率に対する寄与率は、電子部品・デバイス製造業、輸送用機械器具製造業、一般機械器具製造業を合わせると2009年第2四半期が31%、2009年7月が39%であり、これらに電気機械器具製造業、金属製品製造業を加えるとそれぞれ60%、73%となる。なお、製造業の生産は、季節調整値でみると、2008年第2四半期以降減少し、2008年第4四半期、2009年第1四半期にはそれぞれ前期比11.3%減、22.2%減と過去に例をみない大幅な減少（既往の最大の減少は1975年第1四半期の6.7%減）となったが、2009年第2四半期以降（月次では3月以降）増加に転じており、最悪期を脱したといわれている。しかし、2009年7月の生産水準は、最近のピーク（2008年2月）の水準を25%下回っているので、生産の回復傾向が雇用・失業情勢の好転に結びつくにはまだ時間がかかる可能性が高い。

表11 就業者数の増減率（%）

|               | 前年同期比 |       | 寄与度  |      | 寄与率  |      |
|---------------|-------|-------|------|------|------|------|
|               | 09Q2  | 09M7  | 09Q2 | 09M7 | 09Q2 | 09M7 |
| 製造業           | -7.0  | -9.3  | -7.0 | -9.3 | 100  | 100  |
| 食料品製造業        | -1.3  | -1.5  | -0.1 | -0.2 | 2.1  | 1.9  |
| 金属製品製造業       | -8.8  | -17.6 | -0.9 | -1.8 | 12.8 | 19.8 |
| 一般機械器具製造業     | -8.9  | -3.1  | -1.0 | -0.3 | 14.5 | 3.8  |
| 電気機械器具製造業     | -15.2 | -18.8 | -1.1 | -1.3 | 15.3 | 14.2 |
| 電子部品・デバイス製造業  | -10.4 | -18.8 | -0.7 | -1.3 | 9.9  | 14.2 |
| 輸送用機械器具製造業    | -5.2  | -18.3 | -0.5 | -1.9 | 7.0  | 20.8 |
| 上記以外          | -6.1  | -5.6  | -2.7 | -2.4 | 38.4 | 25.5 |
| 資料 総務省「労働力調査」 |       |       |      |      |      |      |

## 2 主要業種の地域分布とその変化

製造業の小分類業種別に就業者数の都道府県別分布をみると、就業者数が最も多い自動車・同付属品製造業と2番目に多い電子部品・デバイス製造業が対照的な分布をしていることが分かる。自動車・同付属品製造業は、

|                           | 従業者数    | 累積<br>構成比<br>(5位) | 分散   |                                    | 従業者数   | 累積<br>構成比<br>(5位) | 分散  |
|---------------------------|---------|-------------------|------|------------------------------------|--------|-------------------|-----|
| 製造業                       | 9912949 | 36.5              | 4.5  |                                    |        |                   |     |
| 陶磁器・同関連製品製造業              | 62147   | 68.8              | 27.2 | 有機化学工業製品製造業                        | 99985  | 41.6              | 7.4 |
| 自動車・同附属品製造業               | 916432  | 59.0              | 19.9 | 発電用・送電用・配電用・産業用電気機械器具製造業           | 338141 | 41.4              | 7.3 |
| 電子計算機・同附属装置製造業            | 114317  | 55.8              | 16.6 | その他のプラスチック製品製造業                    | 124152 | 41.3              | 7.0 |
| 製鉄業                       | 51287   | 58.4              | 16.0 | その他の機械・同部分品製造業                     | 277379 | 41.9              | 6.5 |
| 民生用電気機械器具製造業              | 87433   | 55.2              | 14.6 | 一般産業用機械・装置製造業                      | 275595 | 42.6              | 6.4 |
| 印刷業                       | 381503  | 51.9              | 14.3 | その他の電気機械器具製造業                      | 73396  | 40.5              | 6.3 |
| 計量器・測定器・分析機器・試験機製造業       | 70727   | 53.8              | 12.2 | その他の繊維製品製造業                        | 74050  | 38.9              | 6.0 |
| 医薬品製造業                    | 136516  | 49.6              | 12.1 | 紙製容器製造業                            | 100371 | 41.2              | 5.8 |
| 通信機械器具・同関連機械器具製造業         | 176560  | 52.1              | 12.1 | 特殊産業用機械製造業                         | 136433 | 37.9              | 5.2 |
| 光学機械器具・レンズ製造業             | 64194   | 53.9              | 10.8 | プラスチックフィルム・シート・床材・合成皮革製造業          | 76443  | 37.0              | 5.2 |
| 医療用機械器具・医療用品製造業           | 67932   | 45.1              | 10.3 | 家具製造業                              | 103867 | 37.1              | 5.0 |
| 電子応用装置製造業                 | 69135   | 50.8              | 10.2 | パン・菓子製造業                           | 286390 | 36.8              | 4.8 |
| その他の金属製品製造業               | 71788   | 51.3              | 10.0 | 建設用・建築用金属製品製造業(製缶板金業を含む)           | 295511 | 33.9              | 4.0 |
| 船舶製造・修理業, 船用機関製造業         | 77740   | 49.2              | 9.9  | 調味料製造業                             | 63118  | 32.8              | 3.9 |
| 金属被覆・彫刻業, 熱処理業(ほうろう鉄器を除く) | 128940  | 50.9              | 9.7  | 織物製(不織布製及びレース製を含む)外衣・シャツ製造業(和式を除く) | 152866 | 32.6              | 3.6 |
| 金属加工機械製造業                 | 159961  | 44.1              | 9.5  | 畜産食料品製造業                           | 154636 | 28.5              | 2.9 |
| 工業用プラスチック製品製造業            | 137873  | 44.6              | 9.5  | その他の食料品製造業                         | 447623 | 28.3              | 2.7 |
| 水産食料品製造業                  | 204152  | 41.6              | 8.6  | 野菜缶詰・果実缶詰・農産保存食料品製造業               | 68209  | 26.3              | 2.1 |
| 金属素形材製品製造業                | 111673  | 44.0              | 7.9  | 電子部品・デバイス製造業                       | 598243 | 26.4              | 2.0 |
| 事務用・サービス用・民生用機械器具製造業      | 120318  | 43.9              | 7.8  | 製材業, 木製品製造業                        | 74141  | 23.9              | 1.7 |
| ゴムベルト・ゴムホース・工業用ゴム製品製造業    | 91938   | 42.3              | 7.6  | セメント・同製品製造業                        | 124564 | 24.3              | 1.5 |

資料 総務省「事業所企業統計調査」

少数の地域への集中度が高いのに対し、電子部品・デバイス製造業は多くの地域に分散して分布している。就業者数の都道府県分布の集中・分散の大きさは、就業者数の都道府県別構成比の分散によって把握することができる。分散が大きいほど就業者が少数の地域に集中して分布しており、小さいほど多数の地域に分散して分布しているとみることができる。自動車・同付属品製造業の分散は19.9であり、従業者数が6万人以上の業種のなかでは2番目に高い。一方、電子部品・デバイス製造業の分散は2であり、3番目に低い。自動車・同付属品製造業は、愛知県が28%と際立って高い割合を占めているほか、静岡県（12%）、神奈川県（8%）、埼玉県（6%）、群馬県（5%）など東海地方、関東地方の都県への集中が目立っている。これに対し、電子部品・デバイス製造業は、東京都、長野県がそれぞれ5%台～6%台、神奈川県、埼玉県、福島県がそれぞれ4%台、6位～8位の府県がそれぞれ3%台、9位～24位の府県がそれぞれ2%台と全国の半ばの都府県にそれぞれ2%台～6%台の従業者が分布している。また、これら23都府県の所在地域をみると、関東地方が7都県、東北地方が5県、近畿地方が4府県、信越北陸地方が3県、九州地方が3県、東海地方が2県と、全国の幅広い地域にまたがっている。なお、都道府県別に従業者数が最も多い業種をみると、自動車・同付属品製造業が第1位である地域は、東海地方に4県（愛知県、静岡県、三重県、岐阜県）、関東地方に4県（群馬県、神奈川県、栃木県、埼玉県）、山陽地方に3県（広島県、岡山県、山口県）と全国に11県あり、どの地域も国内主要自動車メーカーの拠点が所在する地域とその周辺の地域である。これらの地域において、県内の製造業従業者に占める同業種の割合は、愛知県が27%、静岡県が22%、群馬県が19%、広島県が15%、他の7県がそれぞれ概ね9%台～13%台となっている。一方、電子部品・デバイス製造業が第1位である地域は、東北地方に6県（秋田県、山形県、岩手県、福島県、青森県、宮城県）、関東地方に1県（茨城県）、甲信越北陸地方に5県（長野県、山梨県、福井県、新潟県、石川県）、近畿地方に3県（滋賀県、京都府、奈

良県), 山陰地方に2県(鳥取県, 島根県), 四国地方に1県(徳島県), 九州地方に4県(鹿児島県, 熊本県, 大分県, 宮崎県)と全国に広く分布して22県あり, 全都道府県の半ば近くを占めている。これらの地域において, 府県内の製造業従業者に占める同業種の割合は, 鹿児島県が23%と特に高く, 次いで秋田県が17%, その他の地域では, 東北地方の県がそれぞれ11%台~14%台, 甲信越北陸地方の県が9%台~14%台, 近畿地方の府県が7%台~10%台, 山陰地方の県が12%台~13%台, 四国地方の県が9%台, 九州地方の県が11%台~13%台となっている。

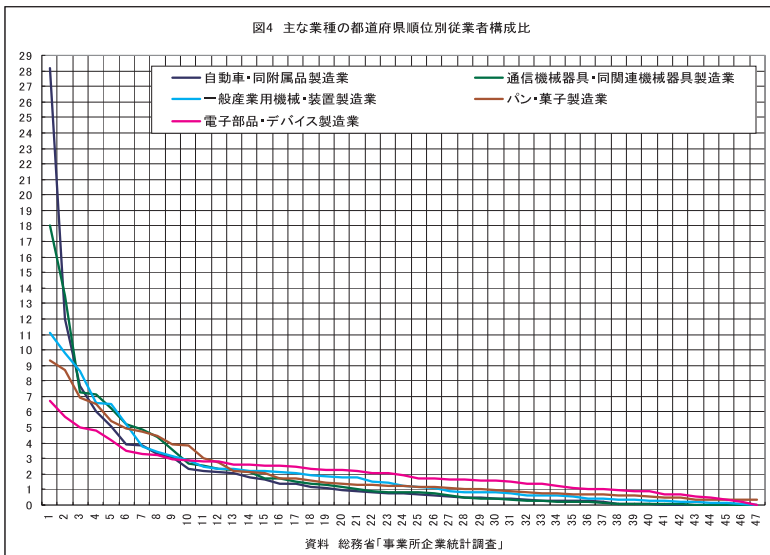
自動車・同付属品製造業に次いで地域別集中度の高い業種は, 電子計算機・同付属装置製造業で, 地域別構成比の分散が16.6であり, 東京都の割合が25%と際立って高いほか, 長野県, 神奈川県などの割合が高く, 上位の3都県で従業者の45%を占めている。また, 民生用機械器具製造業, 印刷業も分散がそれぞれ14.6, 14.3と集中度が高い。民生用機械器具製造業は, 大阪府の割合が20%であることを初めとして, 群馬県, 滋賀県への集中度が高く, 上位3府県の従業者割合が44%を占めている。印刷業は, 東京都の割合が24%と際立って高いほか, 大阪府, 埼玉県の割合が高く, 上位3都府県の従業者割合が42%を占める。この他, 計量器・測定器・分析器・試験機製造業, 医薬品製造業, 通信機械器具・同関連機械器具製造業も分散がそれぞれ12台で, とともに東京都の割合が18%~19%と最も高く, 上位3地域の従業者割合が38%台~40%台と集中度が高い。

一方, 集中度が低く, 多くの地域に広く薄く分布している業種をみると, セメント・同製品製造業, 製材業, 木製品製造業は, 都道府県別従業者構成比の分散がそれぞれ1.5, 1.7と電子部品・デバイス製造業とともに2を下回っている。セメント・同製品製造業は, 上位5地域(北海道, 東京都, 福岡県, 埼玉県, 茨城県)の従業者構成比がそれぞれ4%~6.1%, 6位~19位の地域の構成比がそれぞれ2%~3.4%, 20位~30位の地域の構成比がそれぞれ1.6%~1.9%と全国の都道府県に広く薄く分布している。製材業, 木製品製造業は, 北海道の構成比が8.8%と他の地域よりやや高い

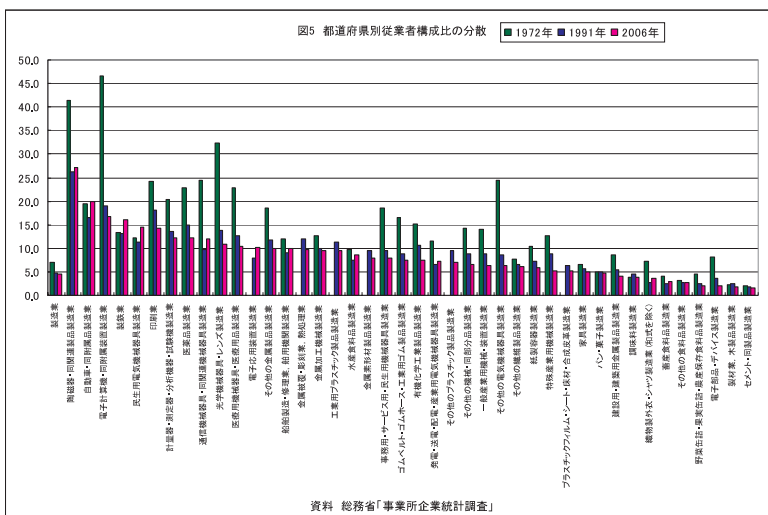
製造業の地域展開

が、2位～8位の地域がそれぞれ3%～4.1%、8位～25位の地域がそれぞれ2%台、26位～35位の地域が1.5%～1.9%と全体としてみると全国の広い地域に比較的均等に分布している。この他、野菜缶詰・果実缶詰・農産保存食品製造業、その他の食品製造業、畜産食品製造業の食料関連3業種も構成比の分散が2台であり、従業者分布の均等度が高い。これらの3業種は、1位の地域の構成比がそれぞれ6%台であり、19位～20位までの地域の構成比が2%以上である。また、織物製外衣・シャツ製造業、調味料製造業、建設用・建築用金属製品製造業、パン・菓子製造業、家具製造業は、構成比の分散がそれぞれ3台～4台であり、上記の6業種に次いで従業者分布の均等度が高い。これらの業種は、1位の地域の構成比が概ね8%台～9%台（織物製外衣・シャツ製造業は7%台）であり、概ね15位～16位（建設用・建築用金属製品製造業は19位）までの構成比が2%以上である。

この他の主要業種をみると、一般産業用機械・装置製造業、その他の機械・同部品製造業、発電用・送電用・配電用・産業用電気機械器具製造業

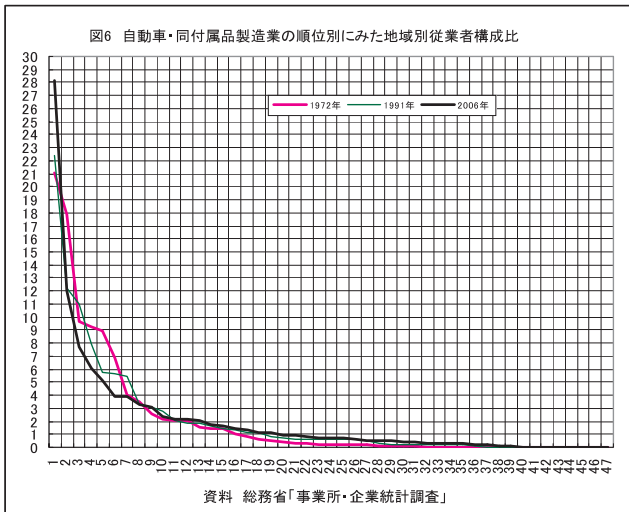


は、都道府県別構成比の分散がそれぞれ6.4～7.3であり、従業者構成比の上位3地域は、前2業種が大阪府、愛知県、東京都、後1業種が愛知県、東京都、静岡県であり、3位までの累積構成比がそれぞれ29%台、10位までの累積構成比がそれぞれ61%台～62%台と集中度が比較的高かった通信機械器具・同関連機械器具製造業に比べるとそれぞれ10ポイント程度低くなっている。また、水産食料品製造業は、都道府県別構成比の分散が8.6と中ほどに位置しているが、従業者構成比1位の北海道が19%と際立って高く、2位～19位までの地域は2%台～6%台と、全国の幅広い地域に亘って比較的均等に分布している。金属加工機械製造業、工業プラスチック製品製造業の地域分布も水産食料品製造業と類似している。都道府県別構成比の分散はそれぞれ9.5と中ほどに位置しているが、従業者構成比1位の愛知県がそれぞれ18%台と際立って高く、2位～17位までの地域はそれぞれ2%程度～8%台と全国の地域に比較的均等に分布している。



自動車・同付属品製造業と電子部品・デバイス製造業は、従業者数の地域分布の推移においても対照的である。自動車・同付属品製造業は、都道府県別従業者構成比の分散が1972年(19.5)から1991(16.4)年に縮小し

た後、2006年（19.9）に再び拡大し1972年とほぼ同水準に戻っている。このことは、自動車・同付属品製造業が、全体としてみると、安定成長期に地域に拡散する方向へ進んだものの、バブル崩壊後に再び集中化する方向に転じ、従業者数の都道府県別構成比でみた地域分布の全体的な集中度は2006年に高度成長期の終盤とほとんど変わらなかったことを示している。これに対し、電子部品・デバイス製造業は、従業者構成比の分散が1972年（8.1）、1991年（3.7）、2006年（2.0）に一貫して低下しており、安定成長期、バブル崩壊後を通じて幅広い地域への拡散が続き、従業者分布の均等化が進んだことを示している。

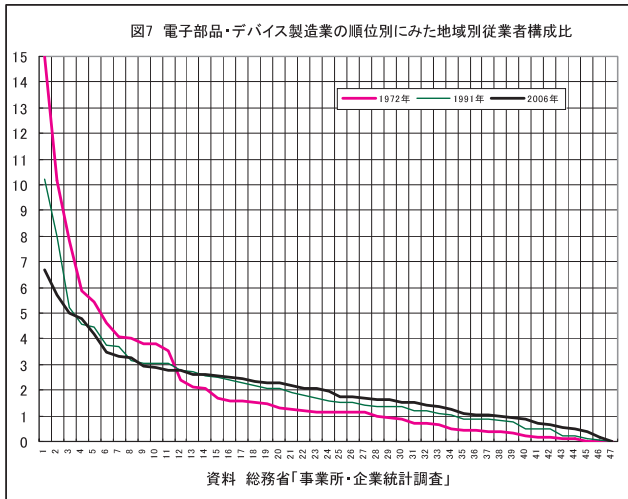


ただし、自動車・同付属品製造業でも、地域分布の全体的な集中度に大きな変化はみられなかったものの、個々の地域についてみるとかなり大きな変化が起きている。具体的には、1972年から2006年の間に従業者構成比1位の愛知県（1972年1位）、2位の静岡県（同5位）の構成比がそれぞれ7ポイント、3ポイントと大幅に上昇する一方で、1972年の従業者構成比2位の神奈川県（2006年3位）、3位の広島県（同7位）、4位の東京都（同6位）の構成比がそれぞれ10.2ポイント、5.8ポイント、5.3ポイント

と大幅に低下している(この他、1972年に8位の大阪府が1.4ポイント低下)。これらの地域はそれぞれが国内主要自動車メーカーの拠点が存在する地域であるから、このような変化は、この期間における国内自動車メーカーの盛衰を反映している側面がある。このような変化の結果、1972年～2006年に、従業者構成比2位～8位の地域の構成比が低下して9位以下の地域の構成比が上昇し、構成比1ポイント以上の地域が15地域から19地域に増加している。愛知県、静岡県以外でこの期間に構成比が上昇した主な地域は、福島県、栃木県、群馬県、三重県、福岡県、熊本県であり、それぞれ1ポイント程度の上昇となっている。自動車・同付属品製造業では、主要自動車メーカーの拠点地域である愛知県、静岡県への集中化が進む一方、他のメーカーの拠点地域から上記の県を中心とする地域へ若干ながら分散が進んだとみることもできる。このことは、従業者数の変化によっても確認できる。1972年～2007年の間に、神奈川県で4万人、広島県で2.5万人、東京都で2.1万人の従業者が減少したのに対し、愛知県で12.8万人、静岡県で5.4万人と大幅に増加したほか、群馬県で2.2万人、三重県、栃木県でそれぞれ1.6万人～1.8万人、福岡県、岐阜県、埼玉県、福島県、熊本県でそれぞれ1万人～1.3万人の従業者が増加している。<sup>1</sup>

電子部品・デバイス製造業では、1972年～2006年に、従業者構成比1位～11位の地域の構成比が低下して12位以下の地域の構成比が上昇し、構成比2%以上の地域が14地域から24地域に、構成比1%以上の地域が28地域から38地域に増加している。具体的な変化をみると、1972年の従業者構成比1位の東京都(2006年1位)が8.3ポイント、2位の長野県(同2位)が4.4ポイントと大幅に低下したのをはじめ、3位の神奈川県(同3位)、4位の大阪府(同8位)、6位の兵庫県(同16位)がそれぞれ2.1ポイント～2.9ポイント、7位の千葉県(同15位)、9位の群馬県(同13位)、10位の宮城県(同14位)がそれぞれ1.2ポイント～1.5ポイント低下している。これに対し、1972年の従業者構成比34位の鹿児島県が2.8ポイント、19位の新潟県が2.0ポイントとそれぞれ2ポイント以上上昇したのをはじめ、





15位の滋賀県，42位の広島県，16位の茨城県，25位の三重県，27位の熊本県，35位の大分県，30位の岐阜県，32位の石川県，26位の富山県，44位の奈良県がそれぞれ1.0ポイント～1.3ポイント，この他21の地域で従業者構成比が上昇している。従業者数で見ると，1972年～2006年の間に，東京都が1.7万人減，長野県が0.5万人減，大阪府，兵庫県がそれぞれ0.3万人減となったほか，千葉県，神奈川県でも従業者数が減少したのに対し，鹿児島県が1.8万人増，新潟県が1.5万人増，滋賀県，茨城県，福島県がそれぞれ1万人～1.1万人増，熊本県，三重県，岩手県，岐阜県，富山県，大分県がそれぞれ0.8万人～0.9万人増となるなど全国の幅広い地域で従業者が増加している。電子部品・デバイス製造業では，安定成長期，バブル崩壊以降に，東京都・神奈川県，大阪府・兵庫県，長野県を中心とする高度成長期終盤の集積地から全国の幅広い地域に向けて拡散が進んだとみることができる。このような拡散の進み方は，従業者構成比の分散の縮小が安定成長期により大きかったこと（1972年～1991年4.3ポイント縮小，1991年～2006年1.7ポイント縮小）や図7の順位別にみた都道府県別従業者構成比の推移から明らかのように，定成長期により大きかった。東京都，神奈

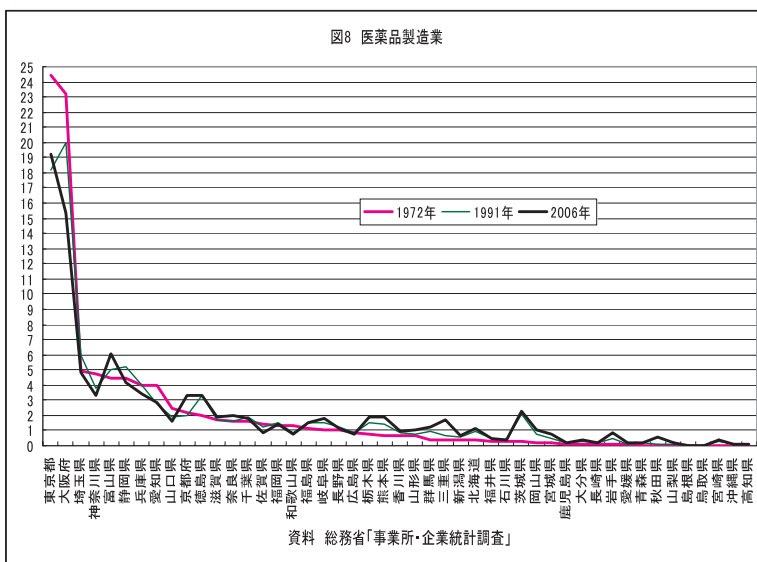
川県, 千葉県, 長野県, 大阪府, 兵庫県における従業者数の減少はバブル崩壊以降の時期に起きており, この期間にはこの他にも全国の多くの地域で従業者数が減少した。<sup>ii</sup> 電子部品・デバイス製造業の地域別従業者分布の均等化と幅広い地域への拡散は, 安定成長期には従来の集積地以外の地域で従業者がより高い伸び率で増加することによって, バブル崩壊以降の時期には従来の集積地より大きな率で減少することによって引き起こされたとみることができる。

製造業全体でも, 従業者構成比の分散は, 1963年(9.8), 1972年(6.9), 1991年(4.8), 2006年(4.5)と時を追って縮小しており, 従業者数の都道府県別分布が高度成長期後半, 安定成長期, バブル崩壊以降の時期に, 均等化する方向に変化してきたこと, 変化の程度が高度成長期後半, 安定成長期により大きく, バブル崩壊以降には小さかったことを示している。2006年における従業者数が原則として6万人以上である42業種について, 1972年, 1991年, 2006年の都道府県別従業者構成比の分散の推移をみると, 3時点の産業分類が接続する36業種のうち31業種で2006年の分散が1972年より小さくなっており, 大半の業種で都道府県別従業者分布が均等化したことを示している。このうち23業種は, 1972年, 1991年, 2006年と時を追って都道府県別従業者構成の分散が縮小しており, 安定成長期, バブル崩壊以降を通じて都道府県従業者分布の均等化が進んでいる。このなかには, 電子計算機・同付属装置製造業, 医薬品製造業, 印刷業, 一般産業用機械・装置製造業, 建設用・建築用金属製品製造業, 家具製造業, セメント・同製品製造業などが含まれる。

電子計算機・同付属装置製造業の地域分布は, 電子部品・デバイス製造業と類似した変動パターンを示し, 変動の程度がより際立っている。同業種の従業者は, 1972年に神奈川県, 東京都にそれぞれ38%, 30%が集中していたが, 1972年~2006年の間に神奈川県の構成比が30ポイント, 東京都の構成比が5ポイント低下している。一方, 同じ期間に, 同業種の従業者構成比は, 長野県が6.5ポイント, 茨城県, 愛知県, 三重県, 滋賀県がそ

れぞれ3.2ポイント～4ポイント、福島県、山形県、新潟県がそれぞれ2.3ポイント～2.7ポイント、岩手県、埼玉県、秋田県、鳥取県、島根県、石川県、山梨県がそれぞれ1ポイント～1.8ポイント上昇しており、同業種が東京都、神奈川県から東日本を中心とする幅広い地域に拡散したことを示している。安定成長期とバブル崩壊以降に分けて、従業者数の変化をみると、1972年～1991年には従来の集積地である東京都、神奈川県を含めほとんどすべての地域で従業者数が増加するなか、長野県、埼玉県、福島県、滋賀県、山形県、岩手県、新潟県、山梨県、石川県などが相対的に高い伸びとなる形で同業種の拡散が進んだ。一方、1991年～2006年には、神奈川県、東京都や安定成長期に従業者構成比が上昇した地域を含む多くの地域で従業者数が減少するなか、三重県、茨城県、島根県、青森県など従業者数が増加した地域や従業者数が減少しなかった地域または相対的に減少の小さかった地域の従業者構成比が上昇する形で拡散が進んだ。この時期の拡散の進み方は安定成長期に比べると小さかった。なお、電子計算機・同付属装置製造業の地域的な拡散は東日本が中心であり、電子部品・デバイス製造業にくらべると広がりが小さい。<sup>iii</sup>

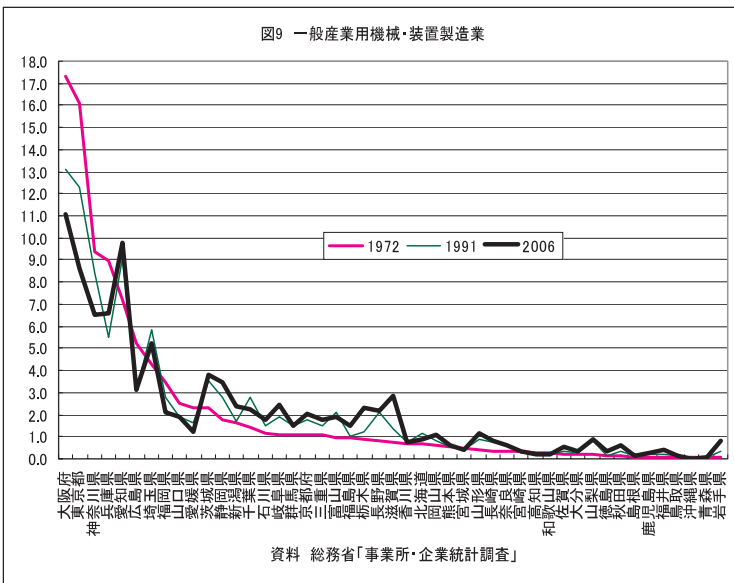
医薬品製造業は、1972年～2006年の間に、高度成長期終盤に従業者構成比が際立って高かった東京都、大阪府（1972年の従業者構成比それぞれ23%～24%）がそれぞれ5ポイント、8ポイントと大幅に低下したほか、高度成長期終盤に3位・4位、6位～9位であった埼玉県、神奈川県、静岡県（同それぞれ4%台）、兵庫県、愛知県（同それぞれ3%台）、山口県（同2%台）など11都府県で構成比が低下し、31道府県で構成比が上昇した。一方、構成比の上昇が比較的大きかった地域は、高度成長期終盤に5位であった富山県、10位・11位であった京都府、徳島県、22位～33位であった茨城県、三重県、熊本県、栃木県、群馬県、岡山県、北海道などであり、地域的にも、高度成長期終盤の順位でも多岐にわたっている。安定成長期とバブル崩壊以降に分けて、従業者数の変化をみると、安定成長期には、全体の従業者数が増加するなか、東京都、大阪府、神奈川県、愛知県



などで従業者数が減少し、茨城県、徳島県、富山県、栃木県、熊本県など40道府県で増加した。この期には、3大都市圏の中心部からこれらの県を中心に地域への拡散が進んだとみることができる。バブル崩壊以降には、全体の従業者数が減少するなか、大阪府、埼玉県、静岡県、兵庫県、神奈川県、東京都、愛知県、山口県など1991年の構成比上位都府県を含む23地域で従業者数が減少し、京都府、三重県、富山県など24地域で従業者数が増加した。バブル崩壊以降にも、分布の拡散と均等化が進んだが、その程度は安定成長期に比べると小さかった。なお、東京都、大阪府の2006年の構成比は、1972年に比べると低下しているものの、それぞれ19%、15%と3位の富山県(6%)の2.5倍~3倍以上の際立って大きな割合を占めている。

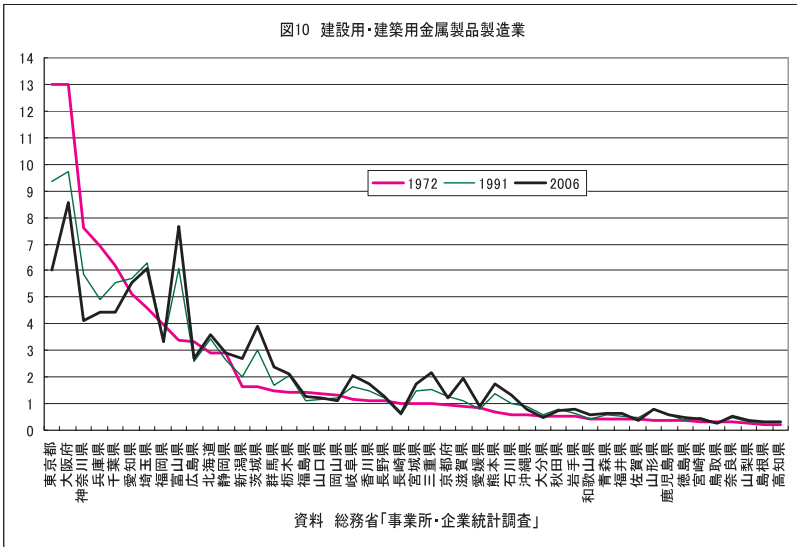
一般産業用機械・装置製造業は、1972年~2006年の間に、高度成長期終盤に従業者構成比が最も大きかった大阪府(1972年の従業者構成比17%)、東京都(同16%)、3位・4位の神奈川県、兵庫県(同それぞれ9%)、6位の広島県(同5%)、8位~9位の福岡県、山口県、愛媛県(同それぞれ

れ2%台～3%台)の構成比が低下し、5位の愛知県、7位の埼玉県、11位～24位の茨城県、静岡県、滋賀県、岐阜県などの構成比が相対的に大きく上昇している。1972年の従業者構成比25位以下の地域でも大半の地域で構成比が上昇しているが、24位以内都府県の顔ぶれは1972年と2006年の間で変わっていないので、この期間における同業種の分布の均等化は上位半数の地域を中心として進んだとみることができる。この期間を安定成長期とバブル崩壊以降に分け従業者数の変化をみると、安定成長期には、従業者構成比が低下した上記の8都府県で従業者数が減少する一方、それ以外の地域の大半で従業者数が増加し全体の従業者数も増加している。安定成長期には、高度成長期終盤に同業種の集積が大きかった8都府県からそれ以外の上位半数を中心とする地域へ向けて拡散が進んだとみることができる。一方、バブル崩壊以降には、全体の従業者数が減少するなか、従業者構成比の上位24地域のうち滋賀県、栃木県など5県を除く19都府県で従業者数が減少している。減少の規模は東京都、大阪府、神奈川県で特に大き



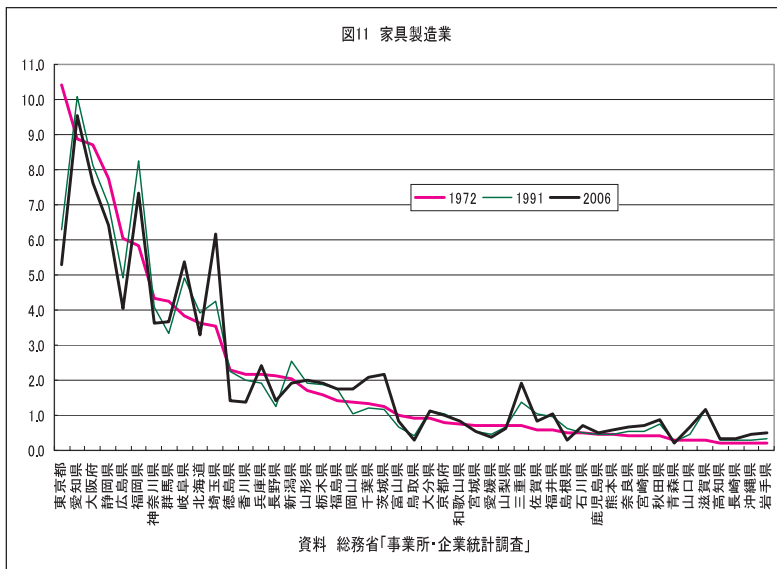
く、従業者構成比がそれぞれ2ポイント程度以上低下した。この期の従業者分布の均等化の程度は安定成長期に比べると小さく、東京都、大阪府、神奈川県など従業者数の減少が大きかった地域で構成比が低下し、従業者数が増加した地域と減少の小さかった地域で構成比が上昇する形で拡散が進んだ。なお、従業者構成比25位以下の地域のなかでも、岩手県、山形県などでは安定成長期、バブル崩壊以降を通じて比較的堅調に従業者数が増加している。

建設用・建築用金属製品製造業は、1972年～2006年の間に地域分布がかなり大きく変化している。高度成長期終盤に従業者構成比が最も大きかった東京都、大阪府(1972年の従業者構成比それぞれ13%)がそれぞれ7ポイント減、4.4ポイント減となったのをはじめ、3位～5位の神奈川県、兵庫県、千葉県(同それぞれ6%台～7%台)がそれぞれ1.7ポイント～3.5ポイント減と1972年の構成比上位5都府県で構成比が大きく低下している。しかも、この5都府県の低下幅は1972年の構成比が大きいほど大きい。このほか、8位・10位の福岡県、広島県(同それぞれ3%台)が0.6ポイント～0.7ポイント減となるなど合わせて12都府県で構成比が低下している。一方、同じ期間に32道府県で構成比が上昇している。そのなかでは、1972年構成比9位の富山県が4.3ポイントと特に大きく上昇し2006年の順位は大阪府に次いで2位となっている。このほか、茨城県の2.3ポイント増をはじめ、埼玉県、三重県、新潟県、滋賀県、熊本県、岐阜県、宮城県などの上昇が比較的大きい。安定成長期とバブル崩壊以降に分けて従業者数の変化をみると、安定成長期には、全体の従業者数が減少するなか、東京都、大阪府がそれぞれ1万5千人～1万6千人、神奈川県、兵庫県がそれぞれ8千人～9千人と特に大幅に減少し、千葉県、広島県、福岡県でもそれぞれ3千人前後の減少となった。一方、富山県が1万2千人、埼玉県、茨城県がそれぞれ6千人～7千人と大幅に増加したのをはじめ、熊本県、栃木県、三重県、愛知県、宮城県、北海道、岐阜県が2千人台、山形県、石川県が2千人弱の増加となるなど、32道府県で従業者数が増加した。安



定成長期には、2大都市圏の中心地域から上記の道県を中心とする地域へ向けて建設用・建築用金属製品製造業の拡散が進んだとみることができ。一方、バブル崩壊以降には、全体の従業者数が大幅に減少するなか、滋賀県を除く46都道府県で従業者数が減少した。減少の程度は、東京都、大阪府、神奈川県、千葉県、埼玉県、愛知県、兵庫県が特に大きく、減少率の違いによって、結果的に、3大都市圏から富山県、滋賀県、茨城県、新潟県、群馬県、三重県などの地域へ拡散が進んだ。

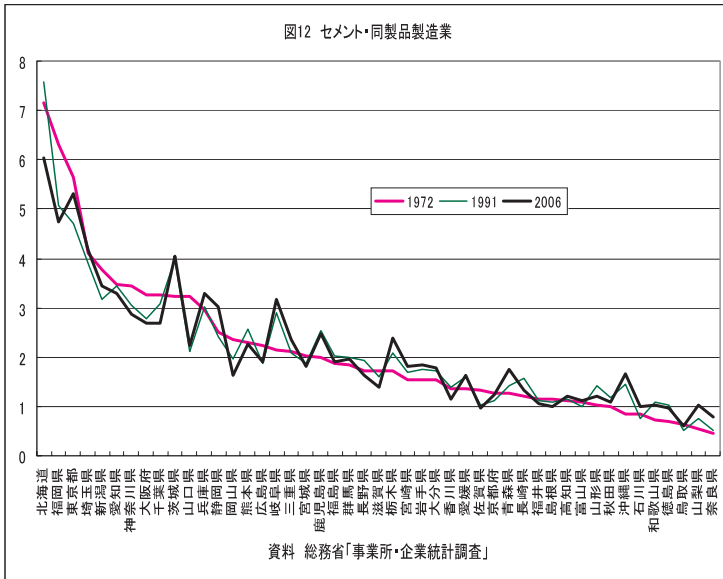
家具製造業は、都道府県別従業者構成比の分散の変化が小さく、地域分布が均等化する方向に動いているもののその程度は小さい。1972年～2006年の変化をみると、高度成長期終盤に構成比が最も大きかった東京都（1972年の構成比10.4%）が5.1ポイントと大幅に低下し、3位～5位の大阪府、静岡県、広島県（同それぞれ6%台～8%台）がそれぞれ1.1ポイント～2.0ポイントやや大きく低下している。この期間に、構成比が低下した地域は17地域であり、そのうち10地域が1972年の構成比15位以内に含まれ、構成比低下の大半がこれらの地域に集中している。一方、構成比



が拡大した地域をみると、高度成長期終盤の構成比11位の埼玉県、6位の福岡県、9位の岐阜県、31位の三重県がそれぞれ1.2ポイント~2.6ポイントと拡大が比較的大きい。このほか、22位の茨城県、43位の滋賀県、21位の千葉県、2位の愛知県も0.6ポイント~0.9ポイント構成比が拡大している。この期間における地域分布の変化は、1972年の構成比分布の上位地域内、3大都市圏とその周辺内に集中する傾向が認められる。安定成長期とバブル崩壊以降に分けて、従業者数の変化をみると、安定成長期には、従業者数が全体で4万6千人減少するなか31都道府県で減少した。特に、1972年の従業者構成比24位以内の地域では21地域で従業者数が減少し、東京都の1万3千人減、大阪府、静岡県、広島県のそれぞれ5千人減をはじめ千人以上の減少となった地域が多い。一方、従業者数が増加した地域は16地域であり、福岡県、滋賀県がそれぞれ1千5百人~1千9百人、三重県が千人弱の増加であったのを除くと概ね5百人未満の小幅な増加であった。この期には、従業者数が大きく減少した地域で構成比が低下する一方、



従業者数が増加した地域と相対的に従業者の減少が小さかった地域で構成比が拡大する形で分布の均等化が進んだ。バブル崩壊以降には、従業者数が8万7千人とさらに大幅に減少するなか、ほとんど全ての都道府県で従業者数が減少した。この期には、相対的に減少の大きな地域の構成比が低下し、相対的に減少の小さな地域の構成比が拡大する形で分布の均等化が進んだ。

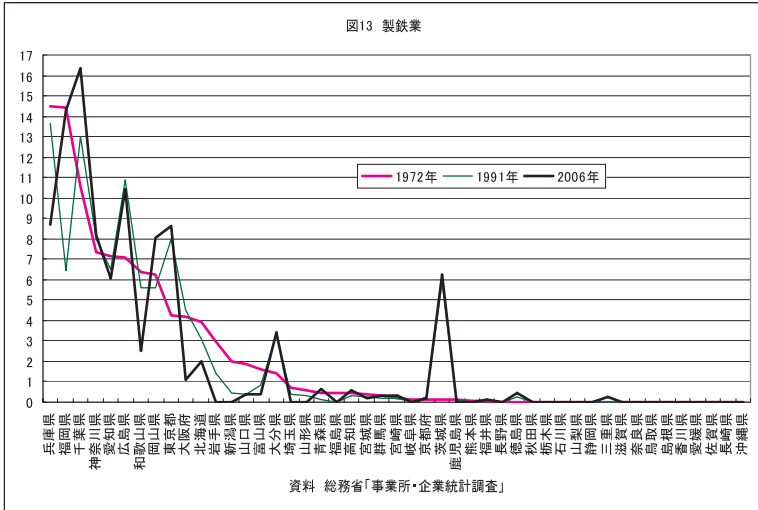


セメント・同製品製造業は、高度成長期終盤の都道府県別従業者構成比の分散が小さく、その変化も小さい。従って、高度成長期終盤に既に地域分布がかなり均等化しており、安定成長期、バブル崩壊以降を通じて分布の均等化が進んだもののその程度は小さかったとみることができる。1972年～2006年における構成比の変化をみると、高度成長期終盤に従業者構成比が1位・2位であった北海道、福岡県（それぞれ6%台～7%台）がそれぞれ1.1ポイント～1.6ポイント減となったのをはじめ、上位11位までの都道府県のうち9都道府県で構成比が低下している。一方、構成比が上昇

した地域は、高度成長期終盤の構成比12位～47位の世界に比較的均等に分布しており、従業者構成比1%以上の地域が高度成長期終盤の40都道府県から2006年には45都道府県に増加している。安定成長期とバブル崩壊以降に分けて、従業者数の変化をみると、安定成長期には、全体の従業者数が4万2千人減少する中、36都道府県で従業者数が減少し、高度成長期終盤の構成比上位地域に減少幅の大きな地域が多かった。一方、この期間に従業者数が増加した地域は11地域であり、このうち6地域は高度成長期終盤の構成比が39位～47位の世界であった。この期には、従業者数が大きく減少した地域で構成比が低下する一方、相対的に従業者の減少が小さかった地域と少数の従業者数が増加した地域で構成比が拡大する形で分布の均等化が進んだ。バブル崩壊以降には、全体の従業者数が9万5千人減と大幅に減少するなか、全ての都道府県で従業者数が減少した。この期には、相対的に減少の大きな地域の構成比が低下し、相対的に減少の小さな地域の構成比が拡大する形で分布の均等化が進んだ。

印刷業は、高度成長期終盤の都道府県別従業者構成比の分散が大きく、その変化も大きい。従って、同業種の地域分布は、高度成長期終盤に集中度が高く、安定成長期、バブル崩壊以降を通じて均等化が進んだとみることができる。高度成長期終盤の都道府県別従業者構成比をみると、東京都が33%と際立って高く、大阪府が12%でこれに次ぎ、3位以下は5%未満である。1972年～2006年間の構成比の変化をみると、東京都が8.8ポイントと特に大幅に低下し、大阪府も1.2ポイント低下している。このほか、10地域で構成比が低下しているが、それぞれの低下幅は4位の北海道の0.8ポイント減を除くと小幅である。一方、同じ期間に構成比が上昇した地域をみると、埼玉県が4.2ポイントと大幅に上昇し、次いで、愛知県、千葉県がそれぞれ1.1ポイント～1.4ポイント上昇している。このほか、20地域で構成比が上昇しているが上昇幅は茨城県の0.8ポイントを除くと比較的小幅である。1972年～2006年における地域分布の均等化は、東京都から埼玉県、千葉県へ向けての首都圏内の拡散を中心とするものであって、

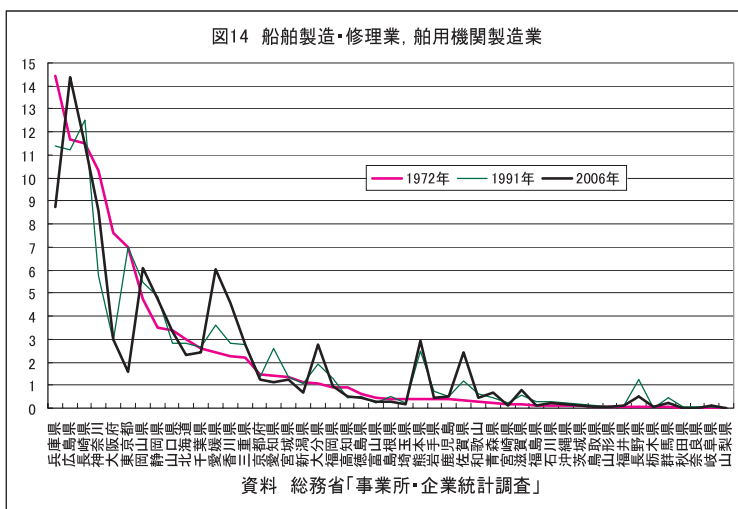
その他の地域の変化は、大阪府の比重がやや低下し、愛知県がやや上昇したことを除くと、概して小幅であった。なお、2006年においても印刷業における東京都の従業者構成比は24%と際立って大きい。



製鉄業は、1972年～2006年の間に都道府県別従業者構成比の分散がやや拡大し、全体としてみると地域分布が集中化する方向に進んだ。この期間における全体としての集中化の進み方はそれ程大きなものではないが、都道府県別の分布には大きな変化がみられた。1972年～2006年の間に、高度成長期終盤の従業者構成比1位の兵庫県（1972年の従業者構成比14.5%）が5.8ポイントと大幅に低下したのをはじめ、7位の和歌山県（同6.4%）が3.8ポイント、10位の大阪府（同4.2%）、12位の岩手県（同2.9ポイント）がそれぞれ3ポイント前後、11位の北海道（同3.9%）、13位の新潟県（同2.0%）がそれぞれ2ポイント前後、5位の愛知県（同7.1%）、14位の山口県（同1.9%）、15位の富山県（同1.6%）がそれぞれ1.1ポイント～1.5ポイント低下した。一方、同じ期間に、27位の茨城県（同0.1%）、3位の千葉県（同10.6%）がそれぞれ6ポイント前後と大幅に上昇したのをはじめ、9位の東京都（同4.2%）、6位の広島県（同7.1%）がそれぞれ3ポ

イント台～4ポイント台、16位の大分県(同1.4%)、8位の岡山県(同6.3%)がそれぞれ2ポイント前後上昇した。2位の福岡県(同14.4%)は0.1ポイント減、4位の神奈川県(7.3%)は0.8ポイント増と構成比がそれほど変わらなかった。製鉄業のこのような地域分布の変化は、従業者数が1972年の19万4千人から2006年の5万1千人へ4分の1ちかくに縮小するなかで起きており、国際的な競争環境の変化に対応する厳しい調整と生産拠点の集約化によるものである。安定成長期とバブル崩壊以降に分けて従業者数の変化をみると、全体では、安定成長期に8万4千人減、バブル崩壊以降に5万8千人減と安定成長期の方が調整の規模が大きかった。安定成長期には、福岡県が2万1千人減、兵庫県が1万3千人減となったのをはじめ、1972年の主要地域(従業者数2千人以上16都道府県)のうち東京都、大分県を除く14道府県で従業者が大幅に減少した。ただし、茨城県ではこの期間に従業者数が6千人増と大幅に増加した。1972年には同県の従業者数は300人未満であったが、国内主要鉄鋼メーカーのリストラの一環として、他地域の事業所が縮小される一方新鋭の事業所が同県に新設されたことによるものとみられる。バブル崩壊以降には、兵庫県が1万人減となったのをはじめ、1991年の主要地域(従業者数1千5百人以上の14都道府県)のうち福岡県を除く13地域で従業者数が大幅に減少した。これにより、1972年に主要地域の一角に位置していた岩手県、新潟県の従業者数は0となった。

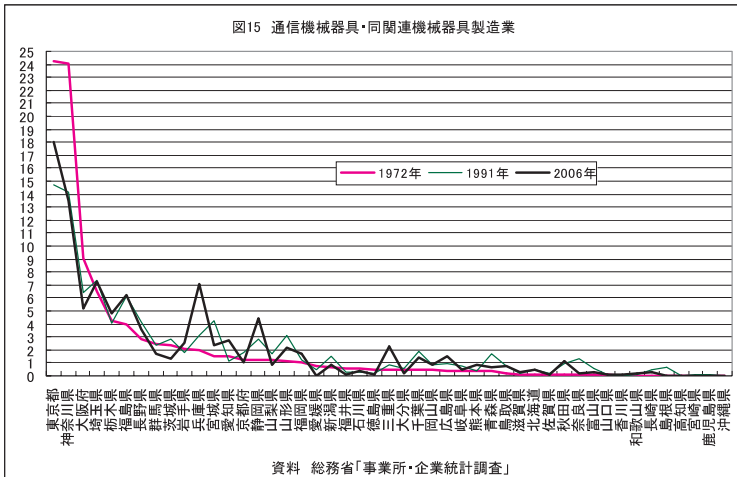
船舶製造・修理業、船用機関製造業は、1972年～2006年の間に都道府県別従業者構成比の分散が縮小しており、全体としてみると、地域分布の均等化が進んだことを示している。このような分布の均等化は、1972年～1991年の間に進んだものであり、1991年～2006年には全体としての分布は横ばい気味に推移している。同業種では、製鉄業と同様に、1972年～2006年の間に厳しいリストラに伴う都道府県別従業者分布の大きな変動が起きた。この期間における従業者構成比の変化をみると、高度成長期終盤に構成比が最も大きかった兵庫県(1972年の従業者構成比14.4%)が5.7ポイ



ント，6位の東京都（7.0%）が5.4ポイント，5位の大阪府（同7.6%）が4.6ポイントと大幅に縮小し，4位の神奈川県（同10.3%）も1.7ポイント縮小した。一方，同じ期間に，12位の愛媛県（同2.4%）が3.6ポイント，2位の広島県（同11.7%）が2.7ポイント，13位の香川県（同2.2%），26位の熊本県，29位の佐賀県（同それぞれ0%台）がそれぞれ2.1ポイント～2.5ポイント，7位の岡山県（同4.7%），8位の静岡県（同3.5%），19位の大分県（同1.1%）がそれぞれ1.2ポイント～1.7ポイント上昇した。3位の長崎県（同11.5%）の構成比はほとんど変わらなかった。このような地域分布の変化は，全体の従業者数が1972年の30万9千人から2006年の7万8千人へ4分の1に縮小するなかで起きたものであり，構成比が上昇した地域でも，1972年時点の従業者数が少なかった熊本県，佐賀県などを除き，大半の地域で従業者数が大幅に減少した。1972年～2006年の間における同業種の地域分布の均等化は，2大都市圏の中心地域の構成比が大幅に低下する一方，瀬戸内海沿岸の愛媛県，広島県，香川県，岡山県，九州北部の熊本県，佐賀県，大分県などの構成比が相対的に上昇する形で進展したものであり，製鉄業と同様に，造船業をめぐる国際的な競争環境の変

化に対応する国内の厳しいリストラを反映している。安定成長期とバブル崩壊以降に分けて、従業者数の変化をみると、全体では、安定成長期に19万6千人、バブル崩壊以降に3万6千人減少している。この結果は、同業種のリストラが安定成長期に集中的に行われたことを示しており、この期間に全体の従業者数は、3分の1近くに縮小した。都道府県別にみると、1972年の従業者構成1位の兵庫県が3万2千人減、2位～5位の広島県、長崎県、神奈川県、大阪府がそれぞれ2万人減～2万5千人減、6位の東京都が1万4千人減と大幅に減少したのをはじめ、熊本県、佐賀県などをのぞく大半の地域で従業者数が減少している。バブル崩壊以降には、1991年の従業者構成比4位の東京都、2位の兵庫県、1位の長崎県がそれぞれ5千人台～6千人台の減少となったのをはじめ、1991年の従業者数が1000人以上の23地域のうち19地域で従業者数が減少した。この期間に小幅ながら従業者数が増加した地域は、佐賀県、愛媛県、香川県、神奈川県である。なお、2006年における同業種の都道府県別従業者構成比は、1位が広島県(14.4%)、2位が長崎県(11.5%)、3位が兵庫県(8.7%)、4位が神奈川県(8.6%)、5位が岡山県(6.1%)、6位が愛媛県(6.0%)などとなっている。

通信機械器具・同関連機械器具製造業は、都道府県別従業者構成比の分散が1972年～2006年の間に2分の1に縮小しており、この期間に地域分布の均等化が進んだことを示している。この期間を1972年～1991年と1991年～2006年に分けてみると、構成比の分散は前の期間に大幅に縮小した後、後の期間に若干拡大しており、地域分布の均等化が専ら1972年～1991年の間に進行し、1991年～2006年には、逆に若干集中化する方向に動いたことを示している。そこで、安定成長期とバブル崩壊以降に分けて従業者数の変化をみると、安定成長期には、全体で従業者数が3万4千人増加するなか、神奈川県が3万人、東京都が2万9千人とそれぞれ大幅に減少し、大阪府も7千人減少したのに対し、宮城県、福島県がそれぞれ1万人台、山形県が8千人、静岡県、長野県がそれぞれ6千人台、千葉県、埼玉県、青



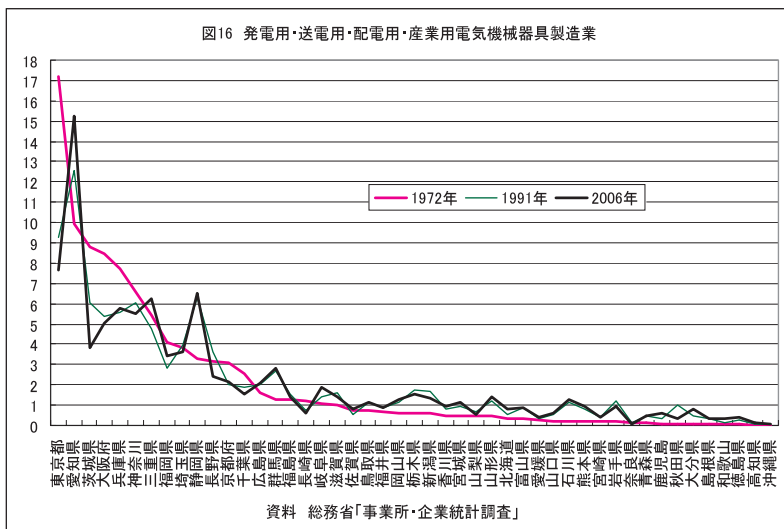
森県，兵庫県がそれぞれ5千人台，新潟県，秋田県がそれぞれ3千人台，島根県，鳥取県，広島県など6県がそれぞれ2千人台と18府県で従業者数が2千人以上増加した（このほか，富山県，長崎県，岡山県，岐阜県，三重県，北海道がそれぞれ1千人台増加し，24道府県で1千人以上増加）。この期間には，2大都市圏の中心地域からそれぞれの大都市圏内の他地域と東北地方，東海地方，信越地方，中国地方を中心とする地域へ向けて同業種の拡散が進んだとみることができる。その拡散の進み方は，概して，東日本の方が大きかった。しかし，バブル崩壊以降には，全体の従業者数が21万5千人と大幅に減少し，2006年の従業者数（17万7千人）は1972年（35万7千人）の2分の1に縮小した。このような状況のもと，神奈川県が3万1千人，東京都が2万6千人，大阪府，埼玉県がそれぞれ1万6千人，福島県，宮城県がそれぞれ1万2千人～1万3千人と大幅に減少したのをはじめ，兵庫県，愛知県，三重県など4県を除く43都道府県で従業者数が減少した。安定成長期に従業者数が1千人以上増加した24道府県でも，12府県は，バブル崩壊以降に安定成長期の増加分を超えて従業者数が減少し，2006年の従業者数が1972年を下回った。安定成長期に従業者数が1千

人以上増加した24道府県のうち、バブル崩壊以降も従業者数が増加した地域は、兵庫県、三重県のみであり、2006年の従業者数が1972年を上回った地域は、この2県のほか、静岡県、秋田県、広島県、千葉県、鳥取県、長崎県、北海道、富山県など10道県である。このような安定成長期とバブル崩壊以降における従業者数の変化の結果、1972年～2006年の間に、都道府県別従業者構成比は、高度成長期終盤に際立って大きな割合を占めていた東京都（1972年の従業者構成比24.2%）と神奈川県（同24.0%）がそれぞれ6.2ポイント、10.6ポイントと大幅に低下し、3位の大阪府（同9.1%）も3.8ポイント低下した。このほか、8位の群馬県（同2.5%）、9位の茨城県（同2.3%）がそれぞれ0.8ポイント～1.0ポイント低下するなど合わせて12都府県で低下したが、構成比低下の大半は神奈川県、東京都、大阪府に集中している。一方、同じ期間に、11位の兵庫県（同1.9%）が5.2ポイントと大幅に拡大したのをはじめ、15位の静岡県（同1.2%）が3.2ポイント、6位の福島県（同3.9%）が2.3ポイント、24位の三重県が1.8ポイント、13位の愛知県（同1.5%）、17位の山形県（1.1%）、28位の広島県、36位の秋田県がそれぞれ1.1ポイント～1.2ポイントなどと、27道県で従業者構成比が拡大した。同業種は、安定成長期とバブル崩壊以降を通してみると、高度成長期終盤に過半が集中していた2大都市圏の中心からそれぞれの大都市圏内の他地域と東海地方、東北地方を中心とする地域へ向けて拡散が進んだとみることができるであろう。なお、バブル崩壊以降（1991年～2006年）に地域分布が若干集中化する方向に動いたのは、全体の従業者数が著しく減少するなか、東京都の従業者数も大きく減少したものの、減少率が全国平均を下回ったためその構成比が大幅に上昇したこと、兵庫県の従業者数が小幅ながら増加したためその構成比が大幅に上昇したことなどにより、結果的に、2大都市圏への集中度が上昇したことによるものである。

発電用・送電用・配電用・産業用電気機械器具製造業は、1972年～2006年の間に、都道府県別従業者構成比の分散が11.6から7.3に縮小しており、



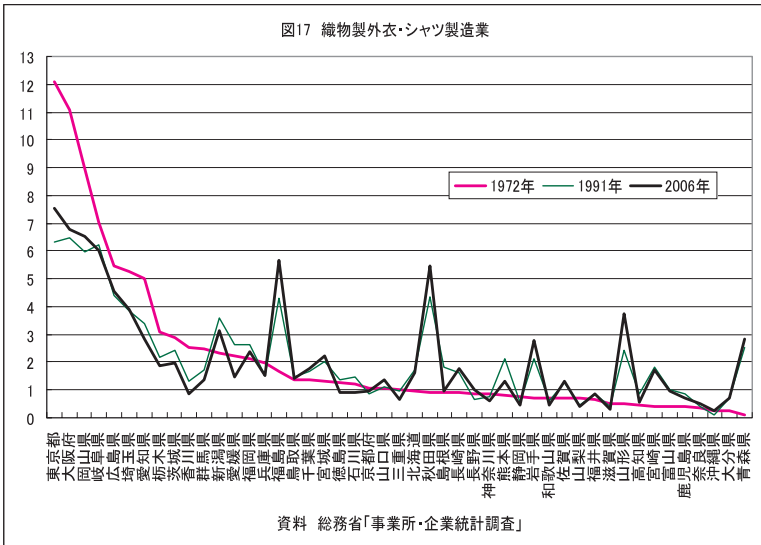
地域分布の均等化が進んだことを示している。この期間を、1972年～1991年と1991年～2006年に分けてみると、従業者構成比の分散は、前の期間に半分近くに縮小した後、後の期間にわずかながら拡大しており、同業種の地域分布の均等化が専ら安定成長期に進行し、バブル崩壊以降には横ばいしないしわずかに集中化する傾向にあったことを示している。安定成長期とバブル崩壊以降に分けて、従業者数の変化をみると、安定成長期には、全体の従業者数が1972年の39万1千人から1991年の52万4千人へ13万3千人増加するなか、高度成長期終盤に最も従業者構成比が大きかった東京都が1万9千人と大幅に減少したのをはじめ、4位の大阪府が5千人弱減、3位の茨城県が3千人弱減、12位の京都府、8位の福岡県、5位の兵庫県がそれぞれ1千人台減などと9都府県で従業者数が減少している。一方、同じ期間に、2位の愛知県が2万7千人、10位の静岡県が2万人と大幅に増加したのをはじめ、15位の群馬県が9千人増、11位の長野県、24位の栃木県、25位の新潟県、6位の神奈川県がそれぞれ6千人台増、9位の埼玉県、37位の岩手県、34位の石川県、41位の秋田県がそれぞれ5千人台増、19位の滋賀県、29位の山形県、14位の広島県がそれぞれ4千人台増、23位の岡



山県, 35位の熊本県, 21位の鳥取県, 18位の岐阜県, 31位の富山県, 27位の宮城県, 26位の香川県, 42位の大分県, 39位の青森県など11県がそれぞれ2千人台~3千人台増などと38道県で従業者数が増加した。安定成長期には, 2大都市圏の中心から全国各地へ向けて, 同業種の拡散が進み, 拡散の程度は東海地方, 北関東地方, 信越地方, 東北地方においてより厚かったとみることができる。バブル崩壊後には, 全体の従業者数が2006年の33万8千人へ18万6千人減少するなか, 1991年の従業者構成比2位の東京都が2万3千人減, 5位の茨城県が1万9千人減, 1位の愛知県, 4位の神奈川県がそれぞれ1万3千人~1万4千人減, 7位の大阪府, 3位の静岡県, 9位の長野県がそれぞれ1万1千人減, 6位の兵庫県, 8位の埼玉県がそれぞれ8千人台~9千人台減となったのをはじめ, 41都府県で従業者数が減少した。安定成長期とバブル崩壊以降を通してみると, 全体の従業者数が5万3千人減少するなか, 高度成長期終盤に従業者構成比の1位~13位に位置していた地域のうち, 愛知県, 静岡県を除く11都府県(首都圏の4都県, 京阪神大都市圏の3府県, 茨城県, 三重県, 福岡県, 長野県)で従業者数が減少し, 2位の愛知県, 10位の静岡県と14位以下の29道県で従業者数が増加した。1972年~2006年の間に従業者数が増加した主な地域をみると, 愛知県が1万3千人増, 静岡県が9千人増, 群馬県が5千人増, 石川県, 山形県がそれぞれ3千人台増, 栃木県, 熊本県, 大分県, 岩手県, 新潟県, 岐阜県がそれぞれ2千人台増, 宮城県, 岡山県, 鹿児島県, 富山県, 北海道, 香川県, 鳥取県など10道県がそれぞれ1千人台増となっており, 安定成長期における同業種の拡散の効果がバブル崩壊後の厳しい調整を経た後も全国に残ったとみることができる。なお, 1972年の従業者構成比17位の長崎県は, 安定成長期, バブル崩壊以降ともに従業者数が減少し, 期間を通じた減少数が2千人台と13位までの地域に次いで減少が大きかった。

織物製外衣・シャツ製造業は, 1972年~2006年の間に, 都道府県別従業者構成比の分散が2分の1に縮小し, この期間に, 地域分布の均等化が進

んだことを示している。安定成長期とバブル崩壊以降に分けてみると、構成比の分散は、安定成長期に3分の1近くに縮小した後、バブル崩壊以降に若干拡大しており、地域分布の均等化が専ら安定成長期に進行し、バブル崩壊以降には地域分布が若干集中化する方向に動いたことを示している。安定成長期とバブル崩壊以降に分けて、従業者数の変化をみると、安定成長期には、全体の従業者数が1972年の35万8千人から1991年の50万人へ14万2千人増加するなか、1972年に従業者構成比が最も大きかった東京都が1万2千人減、2位の大阪府が7千人減、10位の香川県、3位の岡山県がそれぞれ2千人台減となったのをはじめ、7位の愛知県、8位の栃木県、11位の群馬県など8都府県で従業者数が減少した。一方、同じ期間に、26位の秋田県が1万9千人増、16位の福島県が1万6千人増、47位の青森県が1万2千人増、39位の山形県、12位の新潟県がそれぞれ1万人前後増、33位の岩手県、31位の熊本県、41位の宮崎県がそれぞれ8千人前後増、岐阜県、島根県、福岡県、宮城県、愛媛県、北海道、長崎県がそれぞれ5千人増～5千人台増、佐賀県、千葉県、富山県がそれぞれ3千人台増、鹿児



島県, 石川県, 大分県, 高知県, 徳島県, 広島県, 福井県がそれぞれ2千人台増などと39道府県で従業者数が増加した。安定成長期には, 高度成長期終盤における同業種の3大集積地の従業者が減少する一方, 従来それほど立地がみられなかった地域を含む全国の幅広い地域で従業者数が増加し, 同業種の地域分布の拡散・拡大が進んだ。特に, 東北地方への拡散が顕著であり, 次いで九州地方への拡散が目立った。しかし, バブル崩壊以降に, 全体の従業者数が34万7千人と大幅に減少し, 2006年の従業者数(15万3千人)が1991年の3分の1以下, 1972年の2分の1以下に縮小するなか, すべての都道府県で従業者数が減少した。1972年~2006年を通してみると, 高度成長期終盤の3大集積地がそれぞれ2万人台~3万人台の減少となったほか, 安定成長期に従業者数が増加した多くの地域がバブル崩壊以降にその増加を上回る減少に見舞われ, 高度成長期終盤の4位~7位の地域がそれぞれ1万2千人台~1万6千人台減, 8位~11位の地域が6千人台~8千人台減となったのをはじめ, 39都道府県で従業者数が減少した。一方, 同じ期間に, 秋田県が5千人増, 山形県, 青森県がそれぞれ4千人増, 福島県が2千人台増, 岩手県, 宮崎県がそれぞれ1千人台増となったほか, 大分県, 富山県も若干の増となった。東北地方を中心とするこれらの8地域だけが, 安定成長期における同業種の地域への拡散・拡大の効果を部分的ながらバブル崩壊以降に保持することができたといえるだろう。安定成長期とバブル崩壊以降におけるこのような変化の結果, 同業種では, 地域分布の均等化が進むとともに, 都道府県別構成比に大きな変化が生じた。1972年~2006年の間に, 高度成長期終盤に最大の集積地であった東京都, 大阪府がそれぞれ4ポイント台減, 3位の岡山県, 7位の愛知県がそれぞれ2ポイント台減となったのをはじめ, 11位までの全ての都県で構成比が低下し, 26位の秋田県, 16位の福島県がそれぞれ4ポイント台増, 39位の山形県が3ポイント台増, 47位の青森県, 33位の岩手県がそれぞれ2ポイント台増, 41位の宮崎県, 19位の宮城県, 28位の長崎県がそれぞれ1ポイント前後増と中位, 下位に位置していた県で構成比の上昇が

目立った。この結果、1972年～2006年の構成比順位の変化をみると、1位～4位（東京都、大阪府、岡山県、岐阜県）は変わらなかったものの、1972年の5位・6位（広島県、埼玉県）が7位・8位に、7位～11位（愛知県、栃木県、香川県、群馬県）が12位以下に後退し、代わって16位の福島県が5位に、26位の秋田県が6位に、39位の山形県が9位に、12位の新潟県が10位に、47位の青森県が11位に上昇しており、東北地方の県の上位への進出が目立った。

水産食品製造業は、1972年～2006年の間に、都道府県別従業者構成比の分散がわずかに縮小しているものの、縮小幅が小さいので、全体としての地域分布の集中度に大きな変化はなかったとみることができる。1972年～1991年と1991年～2006年に分けてみると、構成比の分散は前の期間にやや縮小し、後の期間にやや拡大しているが、ともに変化の幅が小さいので、前後の期間を通して全体としての地域分布の集中度に大きな変化はなかったとみることができるだろう。全体の従業者数は、安定成長期に2万8千人増加した後、バブル崩壊以降に4万5千人減少している。安定成長期とバブル崩壊以降を通してみると、1972年の22万2千人から2006年の20万4千人へ1万8千人減少しているが、減少幅は比較的小さい。2006年の都道府県別従業者構成比は、北海道が19%と際立って大きく、宮城県、静岡県がそれぞれ6%台、兵庫県、千葉県がそれぞれ4%台、福岡県、山口県、青森県がそれぞれ3%台、岩手県、東京都など11都府県が2%台であり、19都道府県が2%を超えている。

製材業、木製品製造業は、都道府県別従業者構成比の分散が高度成長期終盤に2.25と小さく、全体として均等度の高い地域分布であった。構成比の分散は、1972年～2006年の間にさらに縮小したものの、その変化は小さく、全体としての地域分布の均等度に大きな変化はなかったとみられる。安定成長期とバブル崩壊以降に分けて、従業者数の変化をみると、安定成長期に1972年の32万6千人から1991年の15万8千人へほぼ半減し、バブル崩壊以降には2006年の7万4千人へさらに半減した。都道府県別にみても、

両期間とも、全ての都道府県で従業者数が減少している。2006年の都道府県別従業者構成比は、北海道が8.8%と最も大きく、静岡県が4.1%、宮崎県、広島県、愛知県、岩手県、長野県がそれぞれ3%台、兵庫県、岐阜県、三重県など18県が2%台、14都府県が1%台と、1%台～3%台の範囲に全国の幅広い地域に所在する37都府県が分布している。

i 自動車・付属品製造業の従業者数と増減は次のとおりである。

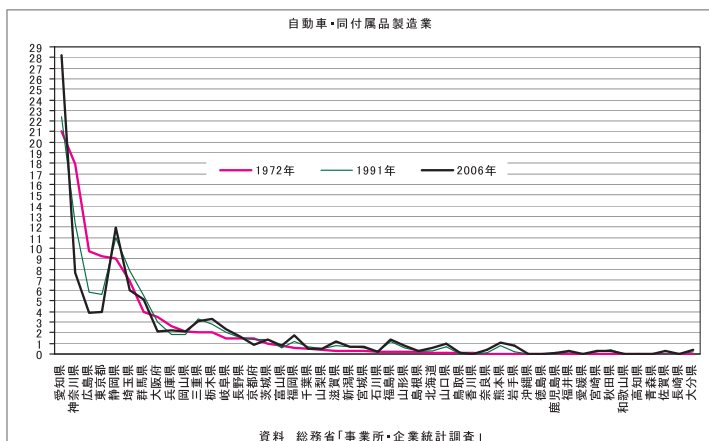
|      | 従業者数   |        | 増減数       |           |           |         | 従業者数  |       | 増減数       |           |           |
|------|--------|--------|-----------|-----------|-----------|---------|-------|-------|-----------|-----------|-----------|
|      | 1972年  | 2006年  | 1972～1991 | 1991～2006 | 1972～2006 |         | 1972年 | 2006年 | 1972～1991 | 1991～2006 | 1972～2006 |
| 全 国  | 617201 | 916432 | 357177    | -57946    | 299231    | 三重 県    | 12605 | 28197 | 19739     | -4147     | 15592     |
| 北海道  | 816    | 4916   | 1558      | 2542      | 4100      | 滋 賀 県   | 2022  | 10388 | 5586      | 2780      | 8366      |
| 青森県  | 20     | 259    | 297       | -58       | 239       | 京 都 府   | 9047  | 8260  | 3867      | -4654     | -787      |
| 岩手県  | 170    | 7012   | 1612      | 5230      | 6842      | 大 阪 府   | 21656 | 19475 | 8042      | -10223    | -2181     |
| 宮城県  | 1553   | 6247   | 4055      | 639       | 4694      | 兵 庫 県   | 16013 | 20091 | 2373      | 1705      | 4078      |
| 秋田県  | 60     | 2980   | 3341      | -421      | 2920      | 奈 良 県   | 175   | 3476  | 1178      | 2123      | 3301      |
| 山形県  | 1097   | 6722   | 4718      | 907       | 5625      | 和歌山県    | 42    | 434   | 233       | 159       | 392       |
| 福島県  | 1329   | 12285  | 9694      | 1262      | 10956     | 鳥 取 県   | 420   | 663   | -103      | 346       | 243       |
| 茨城県  | 6127   | 12792  | 7474      | -809      | 6665      | 島 根 県   | 981   | 2593  | 1493      | 119       | 1612      |
| 栃木県  | 12455  | 30137  | 14562     | 3120      | 17682     | 岡 山 県   | 13226 | 19146 | 4358      | 1562      | 5920      |
| 群馬県  | 24698  | 46667  | 28712     | -6743     | 21969     | 広 島 県   | 59825 | 35316 | -3574     | -20935    | -24509    |
| 埼玉県  | 42387  | 55181  | 34382     | -21588    | 12794     | 山 口 県   | 714   | 8673  | 5638      | 2321      | 7959      |
| 千葉県  | 3288   | 4650   | 2979      | -1617     | 1362      | 徳 島 県   | 100   | 216   | 304       | -188      | 116       |
| 東京都  | 56768  | 36072  | -1666     | -19030    | -20696    | 香 川 県   | 400   | 260   | 66        | -206      | -140      |
| 神奈川県 | 110540 | 70493  | 9076      | -49123    | -40047    | 愛 媛 県   | 75    | 104   | 373       | -344      | 29        |
| 新潟県  | 1865   | 5946   | 4551      | -470      | 4081      | 高 知 県   | 31    | 269   | 27        | 211       | 238       |
| 富山県  | 4953   | 7377   | 1003      | 1421      | 2424      | 福 岡 県   | 3628  | 16243 | 7854      | 4761      | 12615     |
| 石川県  | 1382   | 2154   | 785       | -13       | 772       | 佐 賀 県   | 10    | 2269  | 111       | 2148      | 2259      |
| 福井県  | 82     | 2453   | 1943      | 428       | 2371      | 長 崎 県   | 9     | 151   | 358       | -216      | 142       |
| 山梨県  | 2395   | 4335   | 2190      | -250      | 1940      | 熊 本 県   | 171   | 10109 | 7002      | 2936      | 9938      |
| 長野県  | 9173   | 14786  | 6379      | -766      | 5613      | 大 分 県   | 2     | 3915  | 2054      | 1859      | 3913      |
| 岐阜県  | 9263   | 21599  | 10627     | 1709      | 12336     | 宮 崎 県   | 66    | 2494  | 1530      | 898       | 2428      |
| 静岡県  | 55397  | 109718 | 51598     | 2723      | 54321     | 鹿 児 島 県 | 98    | 589   | 343       | 148       | 491       |
| 愛知県  | 129928 | 258269 | 88587     | 39754     | 128341    | 沖 縄 県   | 139   | 51    | -132      | 44        | -88       |

安定成長期には従業者数が全体で35万7千人増加するなか、愛知県が8万9千人、静岡県が5万2千人、埼玉県が3万4千人、群馬県が2万9千人、三重県が2万人、栃木県が1万人5千人、岐阜県が1万人と、東海地方の4県と関東地方の3県で1万人を超える増加となったほか、福島県、神奈川県がそれぞれ9千人台、大阪府、福岡県、茨城

## 製造業の地域展開

県、熊本県がそれぞれ7千人～8千人台、長野県、滋賀県、山口県がそれぞれ5千人～6千人台、山形県、新潟県、岡山県、宮城県がそれぞれ4千人台などと、関東地方、信越地方、東北地方、山陽地方、九州北部の県で比較的大きな増加となった。一方、広島県、東京都では従業者が減少した。バブル崩壊以降には従業者数が全体で5万8千人減少するなか、神奈川県が4万9千人、埼玉県、広島県、東京都がそれぞれ2万人前後、大阪府が1万人と1万人を超える減少となったほか、群馬県が6千人台、京都府、三重県がそれぞれ4千人台、千葉県が1千人台と、主要自動車メーカーの拠点が所在する首都圏、京阪、広島県、群馬県に減少が集中した。一方、この期間にも日本最大の自動車メーカーの拠点地域である愛知県が4万人と際立って大幅な増加となったほか、岩手県、福岡県がそれぞれ5千人前後、栃木県、熊本県、滋賀県、静岡県、北海道、山口県、佐賀県、奈良県がそれぞれ2千人台～3千人台、大分県、岐阜県、兵庫県、岡山県など6県がそれぞれ1千人台などと、27道県で従業者が増加した。この期間には、東海地方のほか九州北部、東北の一部、北海道、東近畿など主要自動車メーカーの拠点所在地からやや離れた地域での増加が目立った。1972年～2006年を通してみると、従業者数が全体で29万9千人増加するなか、神奈川県が4万人、広島県が2万5千人、東京都が2万1千人と主要自動車メーカーが所在する3都県で大幅に減少し、大阪府でも2千人減少した。一方、別の主要自動車メーカーの拠点所在地では、愛知県が12万8千人、静岡県が5万4千人、群馬県が2万2千人とそれぞれ大幅に増加した。このほか、茨城県、三重県、埼玉県、福岡県、岐阜県、福島県がそれぞれ1万人台、熊本県、滋賀県、山口県が8千人～9千人台、岩手県、福島県、岡山県、山形県、長野県が5千人台～6千人台、宮城県、北海道、新潟県、兵庫県がそれぞれ4千人台などと東海、北関東、九州北部、東北、山陽、信越を中心とする38道県で従業者数が増加した。

自動車・同付属品製造業の都道府県別構成比の推移は次のとおりである。



ii 電子部品・デバイス製造業の従業者数と増減は次のとおりである。

|         | 従業者数   |        | 増減数           |               |               |         | 従業者数  |       | 増減数           |               |               |
|---------|--------|--------|---------------|---------------|---------------|---------|-------|-------|---------------|---------------|---------------|
|         | 1972年  | 2006年  | 1972～<br>1991 | 1991～<br>2006 | 1972～<br>2006 |         | 1972年 | 2006年 | 1972～<br>1991 | 1991～<br>2006 | 1972～<br>2006 |
| 全 国     | 381349 | 598243 | 404303        | -187409       | 216894        | 三 重 県   | 4338  | 13651 | 8785          | 528           | 9313          |
| 北 海 道   | 2438   | 5736   | 5834          | -2536         | 3298          | 滋 賀 県   | 6500  | 17676 | 7564          | 3612          | 11176         |
| 青 森 県   | 2608   | 8224   | 7996          | -2380         | 5616          | 京 都 府   | 9114  | 16641 | 7019          | 508           | 7527          |
| 岩 手 県   | 5944   | 14625  | 15561         | -6880         | 8681          | 大 阪 府   | 22349 | 19348 | 7213          | -10214        | -3001         |
| 宮 城 県   | 14447  | 15448  | 14481         | -13480        | 1001          | 兵 庫 県   | 17624 | 15117 | 6260          | -8767         | -2507         |
| 秋 田 県   | 8021   | 14135  | 13816         | -7702         | 6114          | 奈 良 県   | 322   | 6266  | 6642          | -698          | 5944          |
| 山 形 県   | 13420  | 17372  | 10688         | -6736         | 3952          | 和 歌 山 県 | 650   | 1030  | 68            | 312           | 380           |
| 福 島 県   | 15327  | 25092  | 20725         | -10960        | 9765          | 鳥 取 県   | 3607  | 5406  | 2953          | -1154         | 1799          |
| 茨 城 県   | 6047   | 16635  | 10871         | -283          | 10588         | 島 根 県   | 4710  | 6183  | 2273          | -800          | 1473          |
| 栃 木 県   | 7979   | 13152  | 7134          | -1961         | 5173          | 岡 山 県   | 4367  | 9046  | 6165          | -1486         | 4679          |
| 群 馬 県   | 14541  | 15614  | 5495          | -4422         | 1073          | 広 島 県   | 572   | 8375  | 5309          | 2494          | 7803          |
| 埼 玉 県   | 20723  | 28552  | 14394         | -6565         | 7829          | 山 口 県   | 1281  | 6405  | 5341          | -217          | 5124          |
| 千 葉 県   | 15445  | 15333  | 9527          | -9639         | -112          | 徳 島 県   | 1521  | 5203  | -892          | 4574          | 3682          |
| 東 京 都   | 57150  | 40097  | 5654          | -22707        | -17053        | 香 川 県   | 430   | 2935  | 1115          | 1390          | 2505          |
| 神 奈 川 県 | 29938  | 29846  | 50343         | -50435        | -92           | 愛 媛 県   | 897   | 4185  | 2927          | 361           | 3288          |
| 新 潟 県   | 5609   | 20853  | 18322         | -3078         | 15244         | 高 知 県   | 84    | 2118  | 1807          | 227           | 2034          |
| 富 山 県   | 4283   | 12421  | 11854         | -3716         | 8138          | 福 岡 県   | 4600  | 12379 | 14049         | -6270         | 7779          |
| 石 川 県   | 2593   | 9925   | 7929          | -597          | 7332          | 佐 賀 県   | 1374  | 3157  | 2655          | -872          | 1783          |
| 福 井 県   | 5904   | 9231   | 5171          | -1844         | 3327          | 長 崎 県   | 84    | 4001  | 3875          | 42            | 3917          |
| 山 梨 県   | 4899   | 10260  | 7390          | -2029         | 5361          | 熊 本 県   | 4253  | 13662 | 13871         | -4462         | 9409          |
| 長 野 県   | 38766  | 34205  | 2017          | -6578         | -4561         | 大 分 県   | 1729  | 9729  | 7839          | 161           | 8000          |
| 岐 阜 県   | 3304   | 11670  | 5140          | 3226          | 8366          | 宮 崎 県   | 1676  | 7442  | 7555          | -1789         | 5766          |
| 静 岡 県   | 3649   | 10362  | 8339          | -1626         | 6713          | 鹿 児 島 県 | 1787  | 19793 | 17715         | 291           | 18006         |
| 愛 知 県   | 4351   | 9637   | 7608          | -2322         | 5286          | 沖 縄 県   | 94    | 70    | -94           | 70            | -24           |

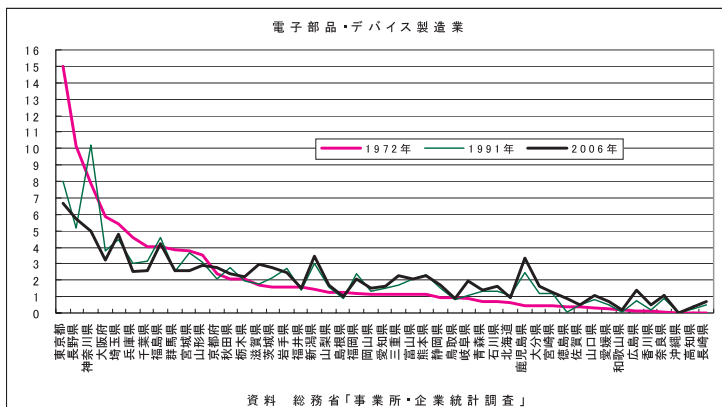
安定成長期には、従業者数が全体で40万4千人増加するなか、神奈川県が5万人、福島県が2万人1千人と2万人を超える増加となったのをはじめ、新潟県、鹿児島県、岩手県、宮城県、埼玉県、福岡県、熊本県、秋田県、富山県、茨城県、山形県がそれぞれ1万人台、千葉県、三重県、静岡県がそれぞれ8千人台～9千人台、青森県、石川県、大分県、愛知県、滋賀県、宮崎県、山梨県、大阪府、栃木県、京都府がそれぞれ7千人台、奈良県、兵庫県、岡山県がそれぞれ6千人台、北海道、東京都など7都道府県がそれぞれ5千人台などと、36都道府県で5万人を超える増加となり、45都道府県で従業者数が増加した。増加数が5万人を超える地域は3大都市圏を含め全国に広がっているが、特に増加数が多い地域は、神奈川県を別にすれば、概して、東北地方、北陸地方、九州地方に多かった。バブル崩壊以降には、従業者数が全体で18万7千人減少するなか、神奈川県が5万人、東京都が2万3千人と2万人を超える減少となったほか、宮城県、福島県、大阪府がそれぞれ1万人台、千葉県、兵庫県がそれぞれ8千人台～9千人台、秋田県、岩手県、山形県、長野県、埼玉県、福岡県がそれぞれ6千人台～7千人台、熊



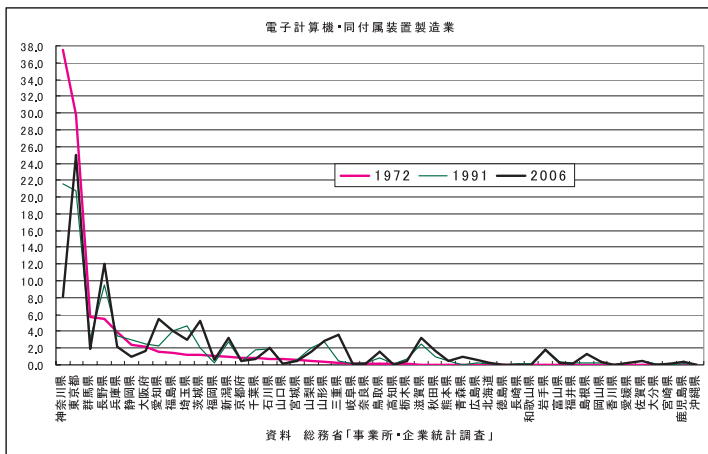
## 製造業の地域展開

本県、群馬県がそれぞれ4千人台、富山県、新潟県、北海道、青森県、愛知県、山梨県がそれぞれ2千人台～3千人台、栃木県、福井県、宮崎県など6県が1千人台などと、33都道府県で従業者数が減少した。減少数が大きい地域は、2大都市圏のほか東北地方に多かった。一方、同じ期間に、徳島県が4千人台、滋賀県、岐阜県が3千人台、広島県が2千人台、香川県が1千人台などと、14府県で従業者数が増加している。1972年～2006年を通してみると、従業者数が全体で21万7千人増加するなか、東京都が1万7千人、長野県が4千人台、大阪府が3千人台、兵庫県が2千人台などと、1972年の従業者数の上位7位（東京都、長野県、神奈川県、大阪府、埼玉県、兵庫県、千葉県）のうち、埼玉県を除く6都府県で従業者数が減少した。安定成長期に従業者数が大幅に増加した神奈川県、千葉県は、バブル崩壊以降にその増加分がすべて失われ、1972年～2006年を通してみると小幅な減少となった。このほか、従業者数の少ない沖縄県が小幅な減少となっている。一方、同じ期間に、鹿児島県が1万8千人、新潟県が1万5千人、滋賀県、茨城県がそれぞれ1万1千人と1万人を超える増加となったのをはじめ、福島県、熊本県、三重県がそれぞれ9千人台、岩手県、岐阜県、富山県、大分県がそれぞれ8千人台、埼玉県、広島県、福岡県、京都府、石川県がそれぞれ7千人台、静岡県、秋田県がそれぞれ6千人台、奈良県、宮崎県、青森県、山梨県、愛知県、栃木県、山口県がそれぞれ5千人台、岡山県、山形県、長崎県、徳島県、福井県、北海道、愛媛県がそれぞれ3千人台～4千人台、香川県、高知県がそれぞれ2千人台、鳥取県、佐賀県、島根県など5県がそれぞれ1千人台などと、40道府県で従業者数が増加している。この期間に増加数が5千人を超えた地域は、九州地方が5県、北陸地方が3県、近畿地方が3府県、関東・山梨地方が4県、東北地方が4県、東海地方が4県、山陽地方が2県と全国の幅広い地域にわたっている。1972年～2006年を通してみると、電子部品・デバイス製造業は、高度成長期終盤の集積地であった2大都市圏と長野県から、上記の地域を中心とする全国の幅広い地域へ拡散が進んだとみることができる。

電子部品・デバイス製造業の都道府県別構成比の推移は次のとおりである。



iii 電子計算機・同付属装置製造業の都道府県別構成比の推移は次のとおりである。



### 参 考 文 献

- 伊達木瀧之助 「製造業の特徴と推移」 長崎県立大学論集第42巻第4号 2009年3月  
 伊達木瀧之助 「製造業の波及効果, 雇用, 賃金, 付加価値」 長崎県立大学経済学部  
 論集第43巻第1号2009年6月